

京都の文化城

京都府教育委員会

序文

京都府は、有形・無形を問わず、数多くの文化財があり、まさに「文化財の宝庫」となつております。

これら多くの文化財は、私達の日々の生活の中に深く根付いて生き続けています。これを守り、後世の人達に伝えるのは、府民一人ひとりのつとめであると同時に、文化財保護行政を担当する本府教委員会の重要な任務の一つです。

京都府では、これらの文化財を守るため、従来から様ざまな施策を実施してまいりましたが、それを一層強化するため、このたび、京都府文化財保護条例を制定し、昭和五七年四月一日施行いたしました。

これを記念し、あわせて文化財への理解が一層深まることを願つて、条例に基づく第一回京都府指定・登録文化財及び文化財環境保全地区を紹介する図録を刊行することにいたしました。
ささやかなものではありますが、各方面において活用され、条例に対する関心が広まり、文化財保護思想の高揚がはかれれば幸甚です。

京都府教育委員会

教育長

川本

邵

凡例

- 一、本図録は、京都府文化財保護条例制定記念として刊行し、第一回京都府指定、登録文化財及び文化財環境保全地区を収める。
- 二、掲載の順序は、建造物をはじめ種別ごととし、各種別内においては、指定、登録の順とした。
- 三、本文の記載は原則として次のとおりとした。

名称（指定・登録）

所在の場所

所有者

法量、（単位はセンチメートル）構造形式等

時代

解説

四、収録した写真は、原則として文化財保護課職員の撮影にかかるものであるが、一部、次の機関の提供になるものを使用させていただいた。記して謝意を表する。

目次

序 文
有形文化財
建造物

凡例

天神社本殿及び境内社八坂神社本殿	山城町
松尾神社拝殿、表門及び境内社御靈神社本殿	山城町
和伎座天乃夫岐壳神社本殿	山城町
有市国津神社本殿	笠置町
武内神社本殿	精華町
六所神社本殿及び覆屋	南山城村
鍬山神社本殿及び境内社八幡宮本殿	亀岡市
能滿神社本殿	丹波町
梅田春日神社本殿及び境内社猿田彥社本殿	瑞穂町
安国寺仏殿	綾部市
万寿院客殿及び開山堂	宇治市
正法寺本堂・大方丈・小方丈・書院	八幡市
鐘楼及び唐門	6
高神社本殿	5
永室神社拝殿	5
永運院本堂及び表門	6
梅宮大社本殿及び拝殿	8
境内社若宮社	7
境内社護王社	10
楼門	9
玉鳳院方丈（禪宮）及び昭堂、庫裏	京都市
唐門、鐘樓、祥雲院殿靈屋	京都市
北真経寺本堂	京都市
楊谷寺本堂、庫裏及び書院、表門	向日市
宝積寺本堂及び仁王門	長岡京市
旦椋神社本殿	大山崎町
天満神社本殿	城陽市
内神社本殿	八幡市
咲岡神社本殿	田辺町
朱智神社本殿	田辺町
棚倉孫神社本殿	田辺町
天神社本殿	田辺町
18 17 16 16 15 15 14 13 12 12	11

美術工芸品

絵画

絹本著色天庵妙受像	綾部市
絹本著色當麻曼荼羅図	久美浜町
方丈壁画 附 紙本著色維摩像	峰山町
紙本淡彩梅桜図	大宮町
紙本淡彩竹林高士図	大宮町
紙本淡彩山水図	大宮町
紙本淡彩山水人物図	大宮町
絹本着色地藏菩薩像	木津町
絹本着色五大尊像 附 旧軸木	大宮町
絹本着色毘沙門天像	大宮町
彫刻	大宮町
木造俊笏律師坐像	京都府
木造藥師如來坐像	木津町
木造金剛力士立像	美山町
木造如意輪觀音坐像	木津町
木造一山國師坐像 附 像内納入品	木津町
木造釋迦如來及兩脇侍坐像	木津町
綾部市	木津町
33 33 32 31 31 30	30 30 29 29
28 27 27	26 25 25 24 23 22 21 21 20 19 19

工芸品

梵鐘(華光寺)

梵鐘(峰定寺)

梵鐘(安祥寺)

梵鐘(地藏院)

梵鐘(海住山寺)

梵鐘(極樂寺)

梵鐘(桂林寺)

熊野十二社権現懸仏

石造御正体

木造懸仏

懸仏

石造御正体

古文書

天庵妙受遺偈

書跡

安國寺文書

附

古記録

阿良須神社文書

無形文化財

工芸技術

黒谷和紙

保持団体

黒谷和紙保存会

無形民俗文化財

棚倉の居籠祭

民俗慣習

田原の御田・かつこすり

松尾寺の仏舞

野中の田楽

櫻原の田楽

犬甘野の御田

天座の田楽

野条の紫宸殿田楽

大身のヤンゴ踊

史跡名勝天然記念物

史跡

周山廃寺跡附窯跡

平安京右京一条三坊九町遺跡

狐谷横穴群

後野円山古墳群

黒部銚子山古墳

湯舟坂2号墳

久美浜町

名勝

江西寺庭園

西光寺庭園

常栖寺庭園

天然記念物

朝倉神社のスギ

オノノ神のフジ

井戸及び細野の枕状溶岩

文化財環境保全地区

旦椋神社文化財環境保全地区

和伎座天乃夫岐壳神社文化財環境保全地区

天満神社文化財環境保全地区

昨岡神社文化財環境保全地区

朱智神社文化財環境保全地区

棚倉孫神社文化財環境保全地区

天神社文化財環境保全地区

高神社文化財環境保全地区

天神社文化財環境保全地区

天神社文化財環境保全地区

天神社文化財環境保全地区

天神社文化財環境保全地区

天神社文化財環境保全地区

天神社文化財環境保全地区

有市国津神社文化財環境保全地区

武内神社文化財環境保全地区

六所神社文化財環境保全地区

市野々の菖蒲田植

久美浜町

久美浜町

49

京都市

京都市

宇治市

加茂町

精華町

亀岡市

久美浜町

八幡市

京都市

加悦町

弥荣町

宮津市

日吉町

綾部市

綾部市

舞鶴市

舞鶴市

山城町

日吉町

弥栄町

舞鶴市

城陽市

八幡市

田辺町

田辺町

田辺町

山城町

宇治田原町

笠置町

山城町

精華町

南山城村

49 48 48 47 47 46 46 44 44 43 42 41 40 40 39 38 38 37 37 36 36 35 35 34

建造物

京都府庁旧本館 一棟

（指定）
京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府

煉瓦造一部一部石造、建築面積二八三八・一平方メートル、二階建、

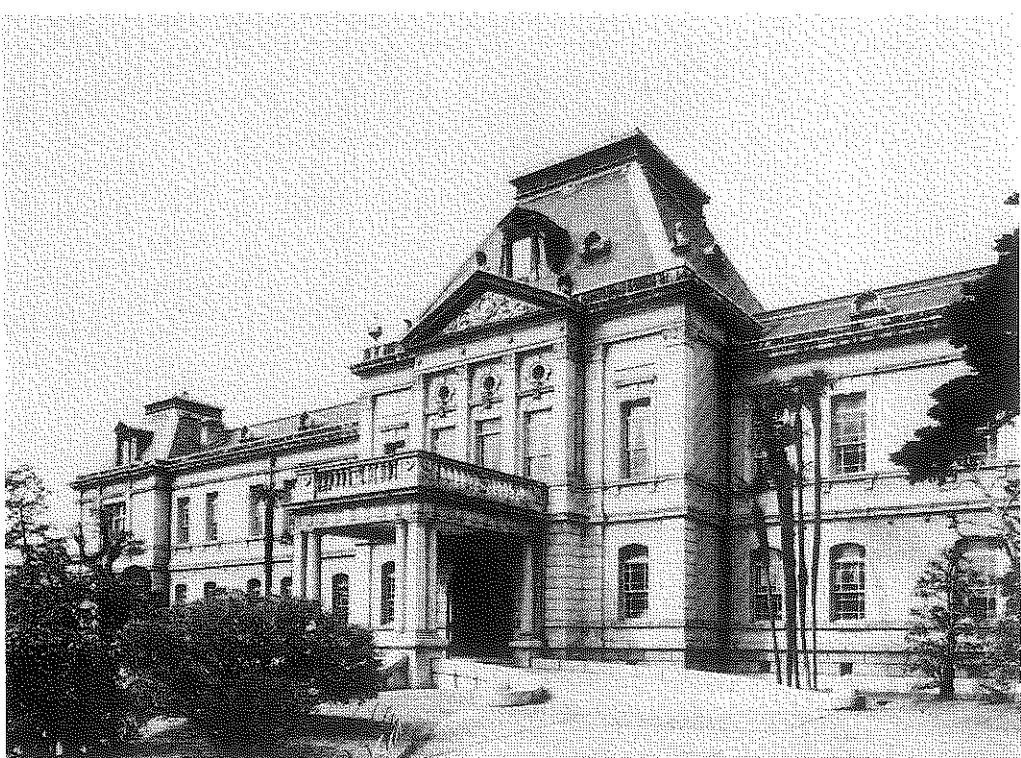
スレート葺

明治三七年（一九〇四）

京都府庁旧本館は、明治三四年に起工され、明治三七年に竣工した。設計者は府技師の松室重光と一井九平で、構造は煉瓦造（一部石造）、二階建で、小屋組は木造、屋根は天然スレート葺である。全体の平面は、南を正面とし、中庭を廻んで口型に室が配置される。玄関つきあたりに大階段があり、この階段を上つて一階南側中央に正庁、その左右に知事室その他的主要室がならぶ。意匠的にみて、玄関、この大階段のまわりが最も見どころが多く、二階主要室の内部意匠も、天井を中心飾や縁型、出入口枠や天井まわりの木工技術など非常に人念なつくりで優秀である。また府議会議事室は北側の中央の位置にあり、ここにも北面して車寄せが設けられている。

全体の様式は後期ネオクラシック様式に入り、とくに正面の一層高くなつた屋根を中心として、左右両翼に対称に張り出した形は、ヨーロッパ近世の大邸館をほうふつさせる。この建物は基礎を地下三メートルから立ちあげる等入念な工事が行なわれていて、全館に暖房装置を取りつけられるなど工学校的見ても当時の最新技術を用いており注目される。工事費も約三三二万円と当時の建物としては破格の金額を要している。

本庁舎は、現在もそのまま役所の建物として使用されており、執務



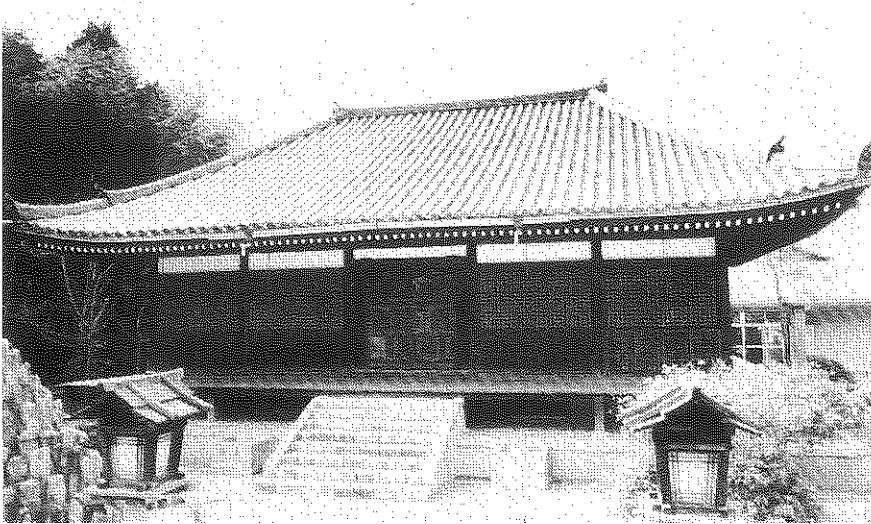
の都合上所々に小さな改造はみられるが、主要部分はほとんど当初のまま、保存状態もよく、全国的にみても明治時代の官庁建築がわずかしか残されていない現在、その価値はきわめて大きい。

歓喜光寺本堂 一棟

(指定)

京都市山科区大宅奥山田一〇

歓喜光寺
桁行五間、梁行五間、一重、寄棟造 本瓦葺
慶長六年(一六〇一)



歓喜光寺は一遍の弟子聖戒が開いた時宗の寺である。明治四〇年、東山五条の法國寺に移転して法國寺を合併しさらに昭和五〇年に現地に移転している。法國寺は天正年間(一五七三~九二)に新上東門院が、遊行三三世満悟を開山として建立したと伝える。本堂はもとの法國寺本堂で、慶長六年(一六〇一)在銘の鬼瓦があり、この時の建立と考えられる。内部に掲げる額から、淀君が二世安樂のため施主となつて建立したものであることが知られる。

方三間の内陣の回りを一間の庇がめぐる平面の方五間の堂で、寄棟造、本瓦葺で四方に切目縁をめぐらせる。身舎柱は円柱、側柱は方柱で、組物は大斗実肘木を側廻りにだけ、柱上と中備えに用いる。内陣は蟻壁付格天井、庇は虹梁付棹縁天井で、外廻り前半分は蔀を用い住宅風の要素が濃い。内部は須弥壇背後の来迎壁をのぞき間仕切がなく、総板敷で時宗本堂としての特色をよく保っている。類例のすくない時宗の本堂遺構として貴重なものである。

旧小林家住宅 一棟

(指定)

京都市右京区嵯峨天竜寺北ノ馬場町

中谷正敏

桁行一三・一メートル 梁行一〇・八メートル

入母屋造、妻入、茅葺、

附 板絵図 二枚

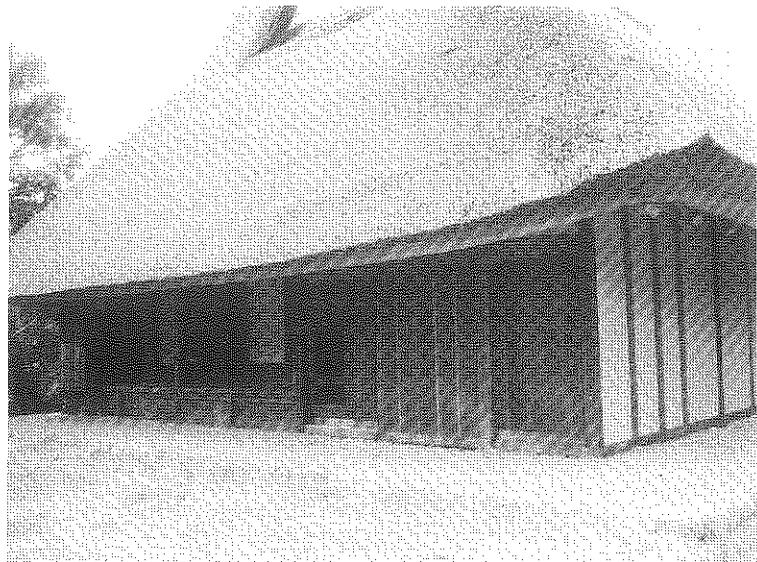
旧長押 一本

文化六年(一八〇九)

旧小林家住宅はもと船井郡園部町穴人についた摂丹型に属する農家である。小林家は中世地侍の流れをくむ庄屋筋の旧家で、江戸中・後期にかけての四代の日記を伝えている。現建物は、日記の記事や戸袋や長押の墨書きから文化六年(一八〇九)に建てられたことが明らかである。

入母屋造、妻入、茅葺の建物で、平面は縦割りで左床上部は二列三

室づつの六室からなる。土間は前後に分かれ、手前は通り、牛屋、物置に区分され、後方は広いオクニワとなり、土カマド・流しを設けている。ダイドコロは土間に向つて開放で、土間境両端の柱を太くして大・小黒柱とする。この建物は、口丹波地方の江戸後期の農家の典型を示すと考えられるが、番付や部材墨書きが豊富な上、板絵図や破風図をのこしていく、建築技術の面からも貴重な資料を提供するものである。



御香宮神社本殿及び拝殿 二棟

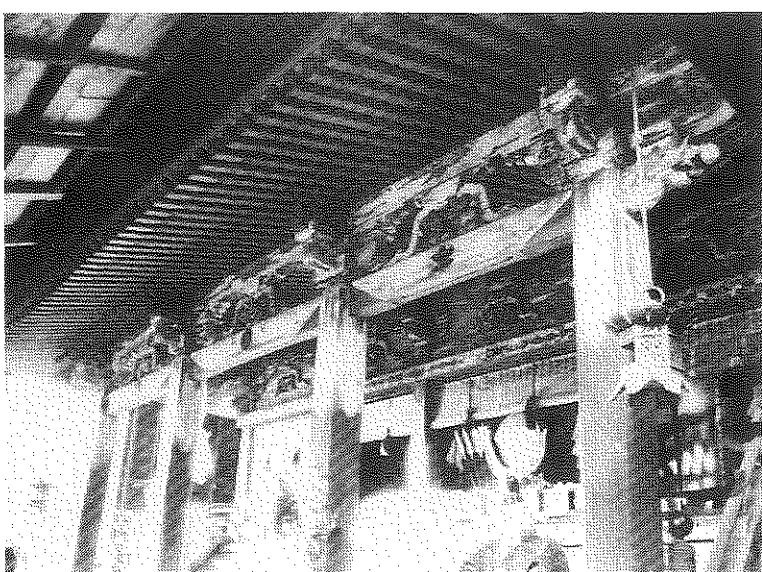
京都市伏見区御香宮門前町
(指定)

御香宮神社

本殿 五間社流造、向拝三間、檜皮葺
慶長十年(一六〇五)

拝殿 衎行七間、梁行三間、入母屋造、正面軒唐破風付 本瓦葺
寛永二年(一六二五)

御香宮神社は、神后皇后、仲哀天皇、応神天皇を祭神とし、創祀もしくは勧請の時期は明らかでない。室町時代には、伏見九郷の鎮守として崇敬されたが、文禄三年(一五九四)に豊臣秀吉が伏見城を築城



するにあたり、大龜谷に移転せしめられたが、その後徳川家康の命により、慶長十年（一六〇五）に旧地すなわち現在地に復帰し、伏見城下の守護神として崇められた。現存する社殿は徳川氏寄進のものが多く、表門（重要文化財）は元和八年（一六二二）に水戸藩祖頼房が寄進、本殿は慶長十年（一六〇五）に家康が再建、拝殿は寛永二年（一六二五）紀伊藩祖頼宣の寄進と伝える。

本殿は大型の五間社流造で、三間の向拝を付し、屋根は檜皮葺とする。身舎組物は出三斗とし、妻は二重虹染で、棟は大瓶束で支え、二重目の虹梁は連三斗で受けている。木部は彩色をほどこすが、上部は極彩色とし、中備の幕股や頭貫木鼻そして向拝を繋ぐ手挾等の彫刻による。身舎組物は出三斗とし、妻は二重虹染で、棟は大瓶束で支え、二重目の虹梁は連三斗で受けている。木部は彩色をほどこすが、上部は極彩色とし、中備の幕股や頭貫木鼻そして向拝を繋ぐ手挾等の彫刻による。

桃山期の華やかな装飾性が認められ、数少ない五間社の遺構として価値が高い。



拝殿は、桁行七間、梁行三間の割拝殿で、中央一間を大虹梁を用いて大きく持ち放し、正面に軒唐破風を付けている。唐破風内は鯉の滝昇り等の一面の彫刻で埋め、馬道側を除く外廻りには各柱間に内法長押と頭貫間に大きな幕股を入れ、その上部には簾束を置いている。唐破風内と幕股、斗拱、束、木鼻には極彩色をほどこし、全体に桃山調のぎやかな外観をつくり出している。

養源院本堂 一棟

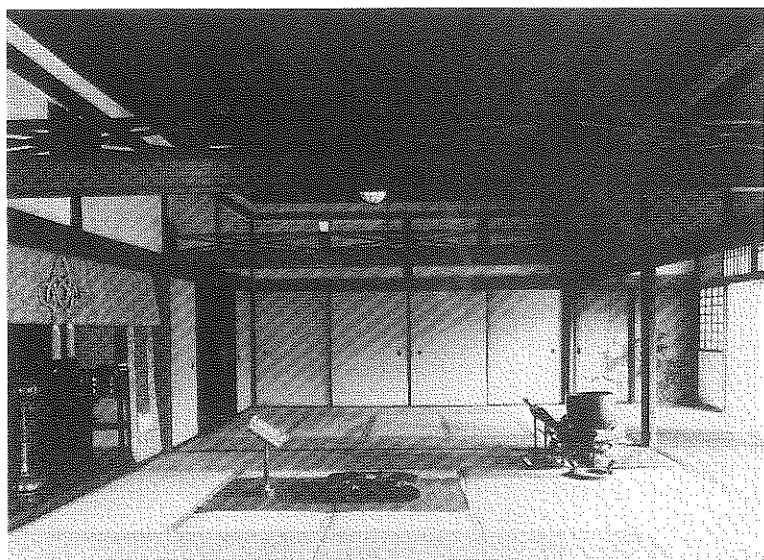
京都市左京区花園妙心寺町
（指定）
養源院

桁行一五・九m 梁行二二・九m、一重、西面入母屋造、東面切妻造
底付 棟瓦葺

附玄関 桁行折曲り五間、梁行一間、切妻造北面唐破風造 棟瓦葺
棟札一枚

慶長四年（一五九九）

養源院は妙心寺玉鳳院開山堂の南に位置し、妙心寺中興日峰宗舜に



より永享四年（一四三二）以降に當なまれ、日峰示寂（一四四八）後、その塔所となつた。現本堂は棟札によると慶長四年（一五九九）の建立で、同年に成つた妙心寺三門と同じ大工棟梁が手がけたものである。建物は禪院客殿に一般的な六ツ間型平面のもので東方を上間とし、南と西に広縁がつく。室中後方の通常仏間と眠藏になる部分がこゝでは両側に金碧の障壁画のある板の間となる。この背後の軒下に突き出して一段高く床を張つた昭堂が設けられ日峰の木像が安置されている。このかたちは慶長期としては他に例を見ないが、これはこの建物が中興開山塔としての特別な意味を付与していたからと思われる。室内前に棧唐戸を構えないなど形式は簡素で、古式の趣を備えている。新しく梁を挿入して補強を行つてゐるが、当初の小屋組がよく残つてゐるもの注目される。玄関も中間を増築するが慶長の古材がよく残つてゐる。

宝塔寺本堂 一棟

京都市伏見区深草宝塔寺山町三二
（指定）
宝塔寺

宝塔寺

桁行七間、梁行七間、一重、入母屋造、向拝三間、本瓦葺
附 棟札一枚
慶長一三年（一六〇八）

宝塔寺は延慶元年（一三〇八）に極樂寺良桂が、京都に日蓮宗を最初に布教した日像に帰依し、極樂寺を日蓮宗に改め宝塔寺と称したのははじまる。現本堂は棟札によると慶長一三年（一六〇八）の建立で、大工棟梁は尾張住人藤原朝臣与右衛門吉重である。

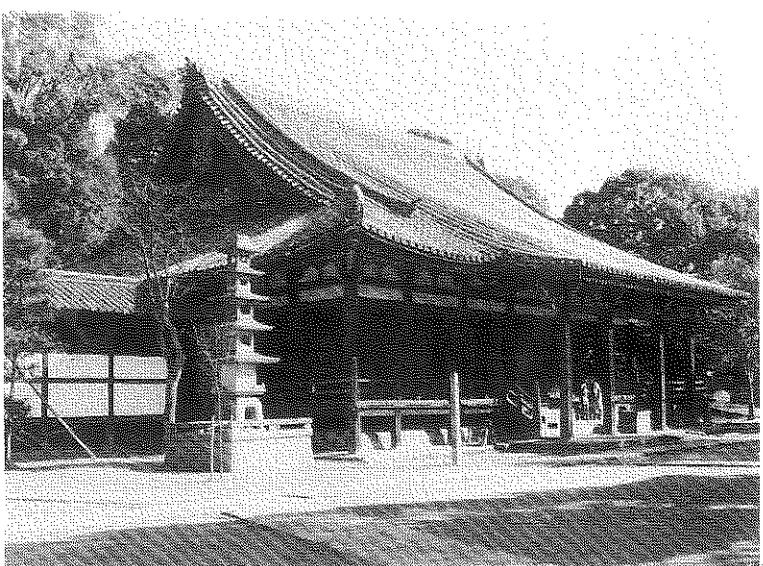
方七間、入母屋造、本瓦葺の堂で、前面二間を吹放しとする。円柱上に出三斗を組み、軒は二軒繁垂木、妻は虹梁大瓶束とする。内陣をかこむ身舎柱は天井上までたち上り挿肘木で出三斗形に組み格天井を受けている。内陣後方中央間に来迎壁をつくり和様須弥壇を構え、須弥壇前一本の柱と来迎柱との回りは台輪を用い組物を詰組としている。吹放しの外陣は鏡板天井とし中央間だけに二本の虹梁をわたし中間に薹股を備えている。和様を基調とした古風な堂であるが、大振りな猪

の目懸魚で妻を飾るなど、細部形式には桃山時代の特色がよく現われている。

万寿院客殿及び開山堂 二棟

宇治市五ヶ庄三番割三四の七
（指定）
万寿院

客殿 桁行一六・九間、梁行一二・四間、一重、入母屋造、棧瓦葺
開山堂 桁行一間、梁行一間、一重、入母屋造、本瓦葺
前室、渡廊下を含む。



延宝三年（一六七五）

万寿院は、中國の僧隱元が宇治の地に開創した黃檗山万福寺の塔頭で、二代目の住持本庵禪師が退隠して、延宝三年（一六七五）に建立した。位置は惣門を入って左へ曲がり奥まつた所にあり、表門に入る玄関をはさんで、西側に庫裏が接続する。また客殿の北側には開山堂を建てて廊下で繋いでいる。

客殿は、桁行八間半、梁行六間半、入母屋造棟瓦葺の建物で、平面は禅宗様方丈に通例の六間取であるが、南側中央室の北側が他の通り半間奥へずれて、平面が正方形となっている点と奥の室列中央の



室が眠蔵や仏間とならずに、まわりを襖で囲う畳敷の室となる点が黄檗宗客殿に獨得の形式である。奥の室列西端の室には、床の間と付書院を付し（東北隅の室に付属する床の間は後補）、天井は六室とも棹縁天井で、手前三室はひと続きの天井とし、室境に竹の節欄間を用いている。

方丈の北縁から階段を上ると、両側に位牌壇を配した前室があり、その奥に、桁行一間、梁行二間、入母屋造本瓦葺の開山堂がある。床は四半敷、天井を鏡板天井とし、須弥壇を後寄りに設けて、木庵禪師の木像を安置している。万寿院客殿は、万福寺の中で開山堂をもつ塔頭としての典型的な形態をもち、年代的にも完存する塔頭建築としては最も古い部類に属する。

正法寺 六棟

（指定）

本堂、大方丈、小方丈、書院、鐘楼、唐門

八幡市八幡清水井七三

正法寺

本堂、大方丈、小方丈、書院、鐘楼、唐門

寛永六年

大方丈 桁行七間、梁行九間、一重、入母屋造、向拝三間、
附 鬼瓦 一個

小方丈 桁行一五・七m、梁行一二・〇m、一重、入母屋造、
附 銅板葺

附 玄関 一棟、一八疊、玄関より成る、向唐破風造、銅板葺

唐門 一棟、一間一戸向唐門、本瓦葺

小方丈 桁行一三・二m、梁行一一・五m、一重、入母屋造、
附 銅板葺

十疊（床・付書院附属）、一五疊、広縁（西側及び北側）
より成る、一重、切妻造、北面及び西面庇付、棟瓦及び
鉄板葺

書院 桁行二間、梁行二間、袴腰付、入母屋造、本瓦葺

元和七年

鐘楼 桁行三間、梁行二間、袴腰付、入母屋造、本瓦葺

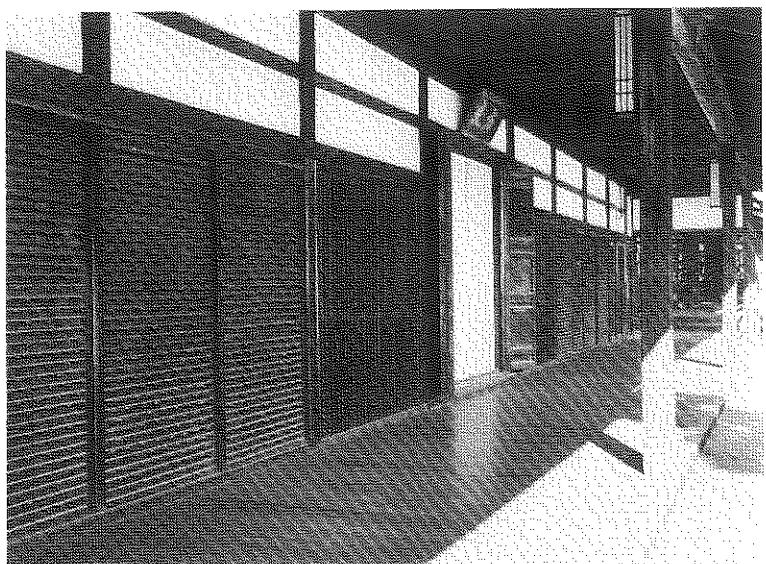
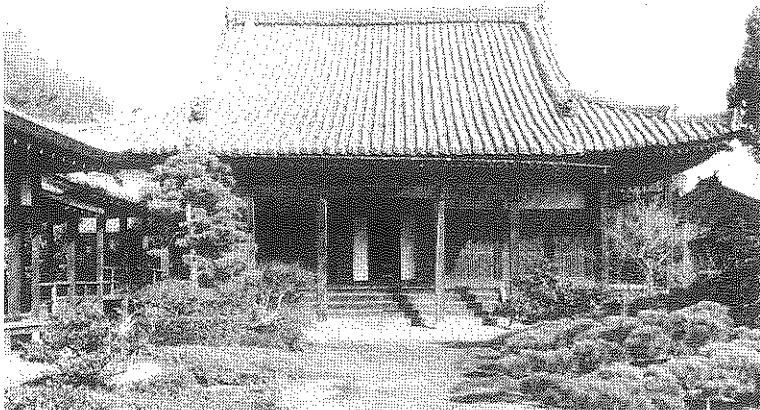
江戸初期
宝永四年

唐門 四脚門、前後唐破風造、側面入母屋造、銅板葺

江戸初期

正法寺は建久二年（一一九一）の開創と伝えられ、江戸時代に石清水八幡宮の社家志水宗清の女お亀の方が徳川家康の側室となつて後の尾張藩主義直を生んだが、没後相應院と号し当寺を菩提寺とした。志水氏は社務職を辞して尾張徳川家の臣となり、当寺は江戸時代を通じて尾張藩の庇護を得た。現在の伽藍は寛永七年（一六三〇）に志水氏が再建したもので、当時の規模が現在までほとんどそのまま保たれている。

本堂は寛永六年（一六二九）の建立で、内部は外陣、内陣、脇陣、後陣から成り、内陣には腰高櫃が廻るなど淨土宗本堂の典型的な形態をもつてゐる。大方丈の建築年代は本堂と同時であることが記録によ



りわかり、平面は禪宗方丈と同じ六間取で、奥列中央室が仏壇、その北側が大床、違ひ棚、付書院を付属した上段の間となる。全体に本格的な書院造の建物である。小方丈は五間とそれを廻る三方の広縁から成り、變った形式の上段の間が付属していく、相應院が參詣の折りに、大方丈が公式の場となつたのに対して、休息される御座の間として使われたものと推測される。書院は宝永四年（一七〇七）の建立で、二間と広縁より成り、一室に床と書院を付属して全体に落ち着いた敷居屋風の意匠がみられる。鐘楼は元和七年（一六二二）建立の典型的な袴腰付鐘楼で、上層は二手先の組物としている。唐門は大方丈の正面に位置し、華やかな桃山調の蔓股を有する建物である。

(指定)

綴喜郡井手町大字多賀小字天王山一
高神社

三間社流造、檜皮葺

附 棟札 八枚 扇額 二面

慶長九年（一六〇四）



高神社は多賀集落東南方の天王山中腹にあり、中世においては大梵天王社と呼ばれ、多賀郷民の尊崇をあつめた。本社には造営関係の文書が多数残されており、神社造営の歴史だけでなく、神事を中心とする中世村落の諸相がわかる点でも貴重である。

現本殿は棟札により慶長九年（一六〇四）河内郡高田村の住人宗左衛門尉が棟梁となつて請負い新造したものであることがわかる。三間社流造、檜皮葺で西面する。組物は柱上に出三斗を組み、組物間に中備として極彩色を施した葵股を置いている。向拝は面取角柱上に連三斗を組み、中備として極彩色の葵股を配し、身舎とは海老虹梁で繋ぐ。妻は二重虹梁大瓶束とし、軒は身舎・向拝とも二軒繁垂木としている。正面は三間とも格子戸引違とするが、中央間は今は建具はない。

本殿は木割りがやや細い点や木鼻等の細部様式に中央の同時期の建物とは少し異質なところもあるが、全体としては、桃山時代の雰囲気をよく伝えていて、建築年代の明らかな神社本殿として重要なである。

氷室神社拝殿 一棟

(登録)

京都市北区氷室町
氷室神社

桁行一間、梁行一間、前後唐破風造、側面千鳥破風付、こけら葺
江戸時代初期

永運院本堂及び表門 二棟

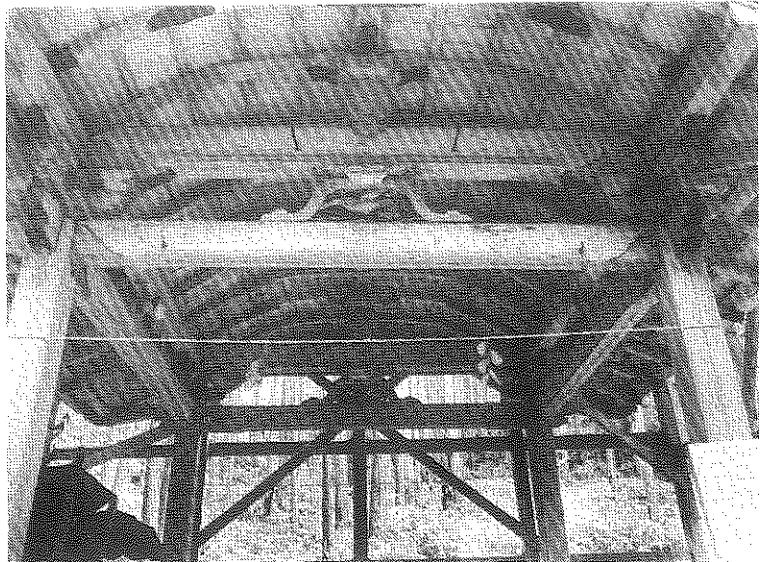
京都市左京区黒谷町 一二一
（登録）

永運院

本堂 柱行一三・八m、梁行西側面一三・八m一重、入母屋造、
棧瓦葺

附玄関 柱行折曲り四間、梁行一間西面唐破風造、棧瓦葺

表門 一間薬医門 切妻造 本瓦葺
元和八年（一六二二）



水室神社の創建、沿革については資料を欠いているが、その拝殿は近衛家に仕えていた当地出身の女中が近衛殿より拝領して移築したと伝えている。拝殿は方一間、四方吹き放しで床を板敷とし、屋根は前後唐破風造で千鳥破風を付し、こけらで葺いている。柱上には出三斗を組み、虹梁風につくつた頭貫及び本鼻、柱間の中央四面に置いた彩色をほどこした臺股の形など細部様式は優秀で、全体の形態もすぐれている。造立年時は江戸初期とみられる。



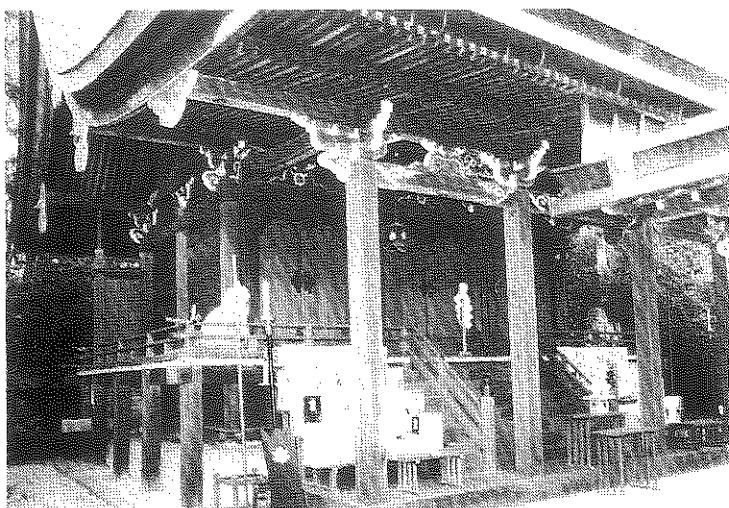
永運院は黒谷金戒光明寺の中の塔頭であるが、慶長年間に徳川幕府の京都での造営事業にたずさわった宮城丹波守豊盛が、母の冥福を祈つて創立した妙蓮院の敷地と建物を引継いでいる。

平面は前面両端に二二畳、中央に一八畳の三室を並べて一八畳（室内）の奥に広い内陣を設け、東側に床と付書院を付属した一〇畳、西側は六畳二室を縦に並べて計七室としている。内陣廻りには改造の痕が見られるが全体としては浄土宗塔頭寺院としての当初の姿をよく残している。また、表門は一間薬医門で本堂と同時期のものと考えられる。

梅宮大社

五棟

（登録）



本殿、拝殿、境内社若宮社、境内社護王社、楼門

京都市右京区梅津フケノ川町三〇
梅宮大社

本殿 三間社流造、檜皮葺

拝殿 柱行三間、梁行三間、入母屋造、妻入、銅板葺

境内社若宮社、一間社流造、檜皮葺

境内社護王社、一間社春日造、檜皮葺

楼門 三間二戸楼門、入母屋造、本瓦葺

本殿 元禄一三年（一七〇〇）

文政五年（一八二二）

境内社若宮社 元禄二三年
境内社護王社 元禄一三年

楼門 文政二年（一八一九）

梅宮大社は延喜式内社で、橘諸兄の母懸大養三千代の創建といわれ、古くは橘氏の氏神であった。現在の社殿は、元禄期のものが中心で、文政年間に大改修をしている。本殿はやや大型の三間社で、正面各間に幣軸付板扉を構えている。境内社は若宮社が一間社流造、護王社の方が一間社春日造で、両者とも本殿と同様正面に幣軸付板扉を構えている。拝殿は、方三間、入母屋造、妻入の建物で、楼門は、三間一戸の楼門であるが、上層の組物を四手先とし、桁と平行の肘木を挙鼻状のものにしている点が変っている。

玉鳳院 六棟
方丈（禪宮）及び昭堂、庫裏、唐門、鐘樓、祥雲院殿靈屋
京都市右京区花園妙心寺町
妙心寺
(登録)



唐門 寛文年間
鐘樓 寛文年間（一六四九）
祥雲院殿靈屋 桃山時代

玉鳳院は妙心寺の開山堂と同じ境内にあって、花園法皇が関山禪師に帰依され、離宮をあらため寺とし、問法のための居所として建てられたのをはじまりとする。現在の建物は、棟札により明暦二年（一六五六年）の建立であることが知られ、方丈、相の間、昭堂より成る。禅宗方丈に共通する六間取型のものであるが、後方室は幅一間しかない。右方後室は拈華室といい、長四畳の上段の間で、床、違い棚、付書院

庫裏 明暦二年（一六五六）
方丈及び昭堂、明暦二年（一六五六）
庫裏 明暦二年

を付す。昭堂は方二間で、禅宗様を基調とし、法皇像を安置する。庫裏も本堂と同時期のもので、当初の形態をよくとどめている。唐門は方丈の前にある向唐破風造の建物で、欄間や棟木を受ける笈形の彫刻に寛文期の特色を見る事ができる。祥雲院殿靈屋は、豊臣秀吉が亡くなつた長子鶴松の供養のために造立したもので、現在の建物は様式的にみて、桃山期のものと思われる。三メートル四方の小堂で細部は禪宗様からなる。床は四半敷で、鏡天井に極彩色の天女を画いて莊嚴している。鐘楼は、通例の四本柱の鐘楼のたちを高くして二階床を張つた形式をもつ。建立は慶安二年（一六四九）である。

北真経寺本堂 一棟

向日市鷄冠井町御尾敷二八
(登録)

北真経寺

桁行三間、梁行六間、一重、寄棟造、背面庇附、本瓦葺、

正保五年（一六四八）

楊谷寺 三棟

本堂・庫裏及び書院・表門
(登録)

長岡京市淨土谷堂の谷二
楊谷寺

本堂 桁行五間、梁行五間、一重、入母屋造 向拝一間、本瓦葺
庫裏及び書院 桁行二・八、梁行一一・一メートル 切妻造、
檜瓦葺

表門 四脚門、切妻造、本瓦葺
本堂 弘化二年（一八四五）



北真経寺は、徳治二年（一二〇七）日像の開山になる日蓮宗寺院で承応三年（一六五四）に日祥により、鶏冠井檀林とされた。現在の本堂は檀林のものとの講堂で、桁行三間、梁行六間の建物で、平面は、前面に桁行の間口いづれに一間幅の広縁をとり、内部は一室とし、奥に須弥壇と脇壇をおく。建物はいく度かの改造をうけていて、当初の形式は明らかにできないが、檀林時代の中心施設であつた講室の建物を受け継いでいる点貴重である。

価値が高い。

宝積寺本堂及び仁王門

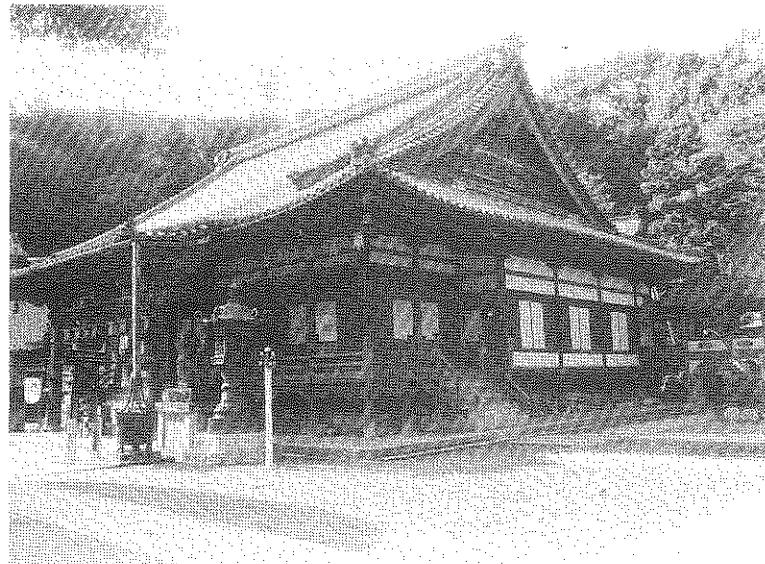
二棟

乙訓郡大山崎町字大山崎小字錢原
（登録）
宝積寺

本堂 柏行五間、梁行五間、一重、入母屋造、向拝三間 本瓦葺
仁王門 三間一戸八脚門、切妻造、本瓦葺

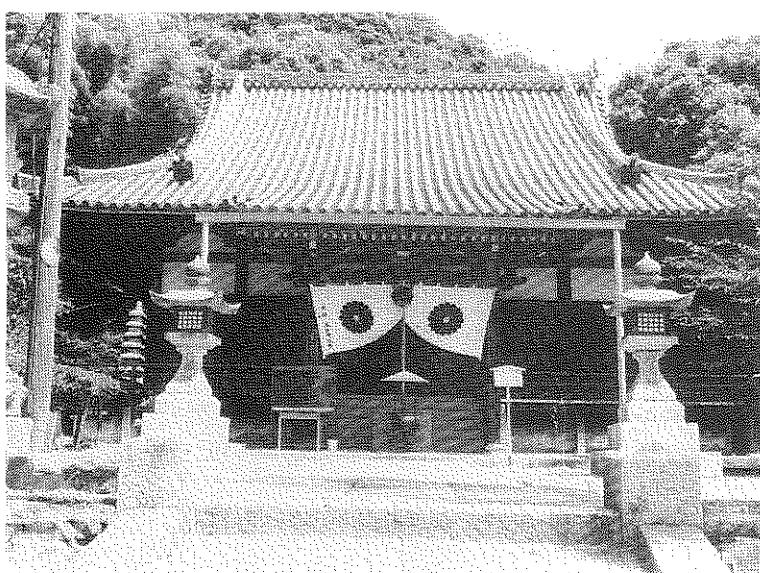
慶長一〇年頃

宝積寺は、真言宗智山派に属し、創立は神龜四年（七二七）と伝え



庫裏及び書院 江戸時代後期
表門 安永年間

楊谷寺は、草創を清水寺の開祖である延鎮僧都と伝え、弘法大師や惠心僧都、水願上人等の入山が伝えられ、修驗の場として知られたらしい。別名を柳谷観音といい。靈水が眼疾に驗があるとして江戸時代より現代に至るまで信仰を集め門前町が出来ている。現在の本堂は江戸末期の建築で、内陣を広くとった簡素なつくりをしている。庫裏及び書院、表門はそれぞれの時代的特色をあらわした上質の建築で、いずれも近世において楊谷寺のもつていた信仰形態を物語る建物として



あさくら
旦棕神社本殿 一棟

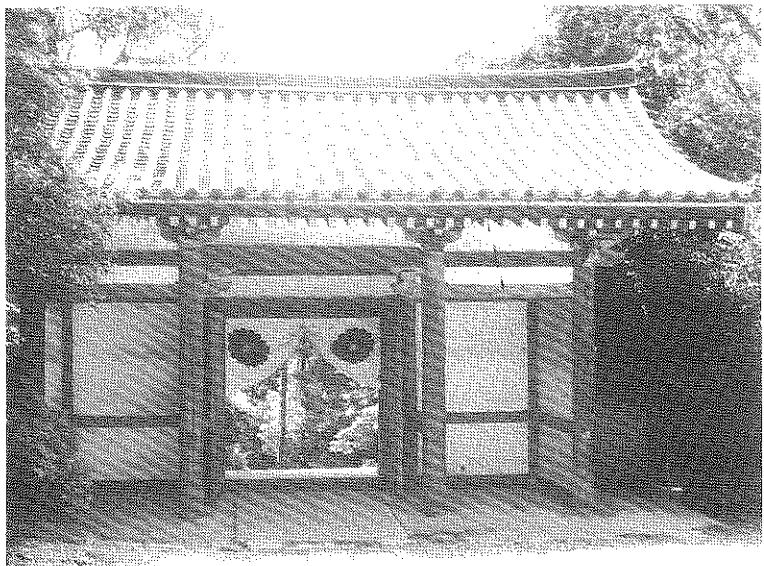
城陽市字観音堂小字甲烟一一十二
(登録)

旦棕神社

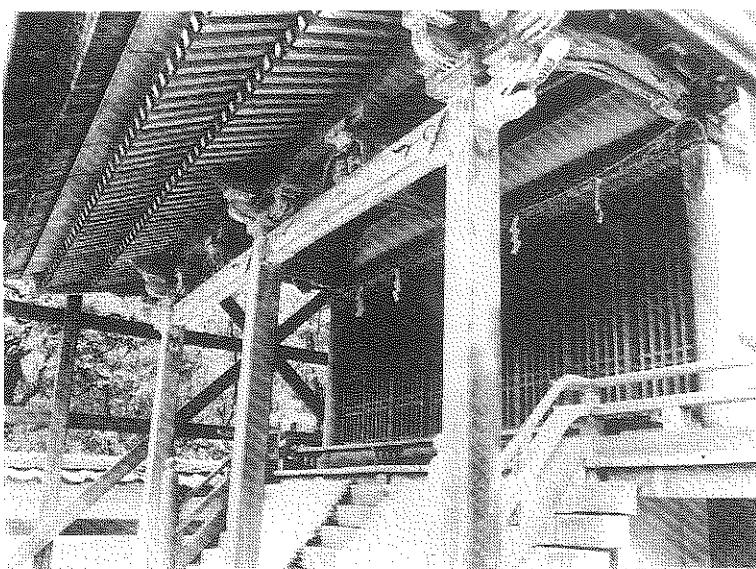
二間社流造、こけら葺
桃山

当社は旧觀音堂村の產土神で、集落の北にやや離れて鎮座する。

本殿の建築は規模も比較的大きく、本格的なつくりで、近在の重要な文化財荒見神社本殿・慶長九年(一六〇四)に共通する細部をもつが、建築年代は荒見社より下るようみえる。裝飾は、桃山時代の華やか



られる。天正一〇年の山崎合戦の時は明智氏と戦う豊臣勢の陣所となつた。現在の伽藍は、その後慶長一〇年(一六〇五)頃に豊臣氏により造営されたものと思われる。本堂は、前面一間分を外陣とし、その奥三間と三間半を内陣と仏壇に分け、周囲を入側とする近世密教系寺院によく見られる平面を有し、仁王門は標準的な三間一戸八脚門である。両方の建物とも未完成の部分が見られ、当時の豊臣氏の置かれていた側面を物語ついて興味深い。



なもので彩色もよく残る。

天満神社本殿 一棟

城陽市宇市辺小字城ノ下八八

(登録)

天満神社

一間社流造、檜皮葺

桃山

当社は市辺の集落からはかなり離れた山麓の少し高いところに境内
がある。

内神社本殿 一棟

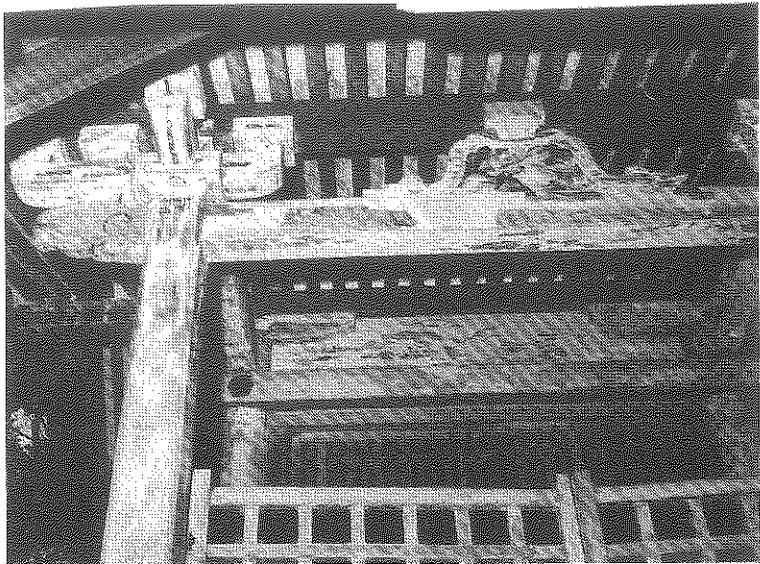
八幡市内里内一
(登録)
内神社

一間社流造、檜皮葺

桃山

一間社流造、銅板葺
江戸中期

本殿は小規模ながら本格的なつくりで、細部は近在の重要な文化財荒
見神社本殿(慶長九年(1604))に共通する。装飾は桃山時代の華
やかなものであるが、手法は庇繋虹梁が直線的であること、妻飾豕投首等、
正統的である。



内里の集落の西端にあり、三方が水田のため、森はよく目立つ。

建築年代は不明だが、海老虹梁のゆつたりした伸びやかさ、幕股の肩の盛上りや足の伸び等、細部絵様から江戸時代中期のものと考えられ、落着いた雰囲気の建物である。

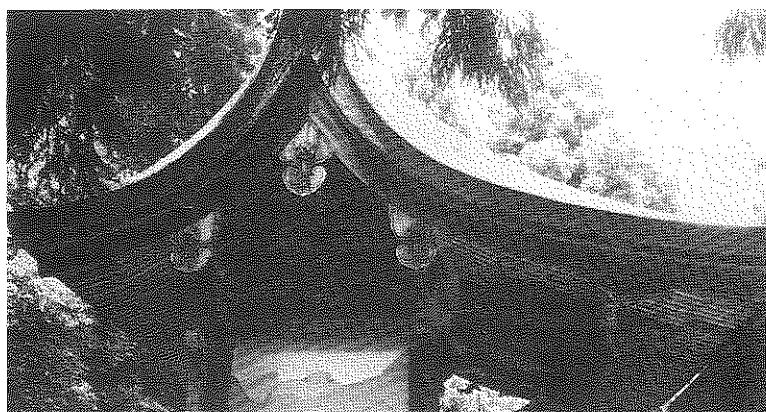


咲岡神社本殿 一棟

(登録)

綾喜郡田辺町大字草内小字宮ノ後五
咲岡神社

一間社春日造、軒唐破風付、檜皮葺
江戸中期



朱智神社本殿 一棟

(登録)

綾喜郡田辺町大字天王小字高ヶ峰
朱智神社

一間社流造、檜皮葺
桃山・慶長二七(棟札)

当社は草内の集落の南端にあって、周囲は堀で囲まれる。
本殿は春日造で、正面に軒唐破風を付ける。彩色が施され、庇繫の海老虹梁の渦文様は力強く伸びて、全体に明るい感じを与える。

天王の集落西方の高ヶ峰の山上に鎮座する。

本殿への石段は三段であるが、第一段の耳石に永正四年（一五〇七）

第二段には天文一〇年（一五四一）の銘がある。

本殿は、棟札と擬宝珠銘から慶長一七年（一六一二）の建立である

ことが知れる。

全体に彩色が残り、装飾は桃山時代らしい華やかなもので、質も高

い。臺股には牡丹に唐獅子、鶴、大黒天などの彫物が施される。木鼻

のなかは渦絵様としたり、リスや花木を彫る。

棚倉孫神社本殿 一棟

綴喜郡田辺町大字田辺小字棚倉四九
(登録)

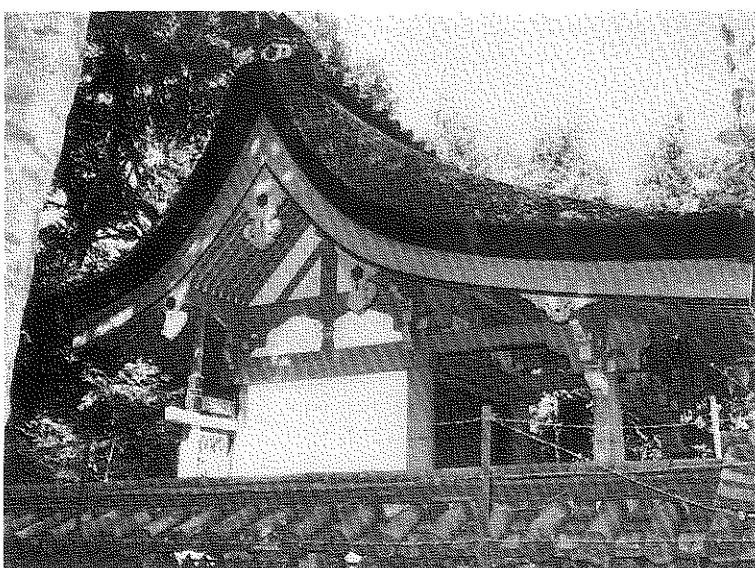
棚倉孫神社

一間社流造、檜皮葺

桃山

当社は田辺町の中心街の北部、小高い丘の上に立地する。

本殿は境内西方に東面し、建築年代は様式からみて桃山時代と思われる。細部意匠からみて、京都の中央の作事に参加した大工の手によるものと考えられること、また臺股や脇障子、庇頭貫の木鼻の彫物にも彩色が施され、華やかなことが特長である。



天神社本殿 一棟

(登録)

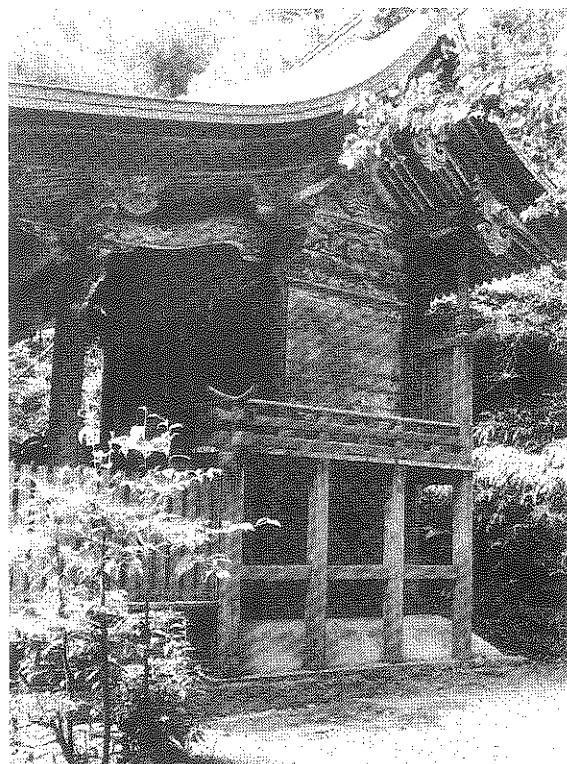
綏喜郡田辺町大字松井小字向山一

天神社

本殿
一間社流造、檜皮葺

二間社流造、銅板葺

江戸中期



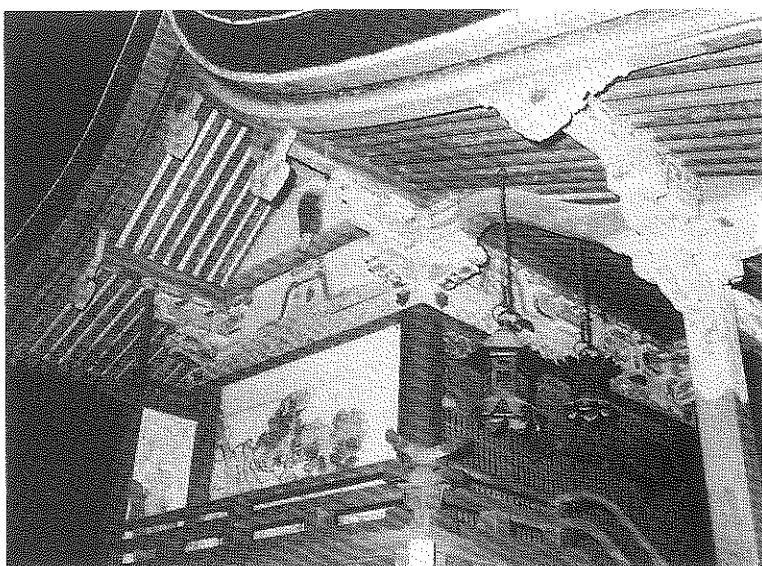
天神社本殿及び境内社八坂神社本殿 二棟

(登録)

綏喜郡宇治田原町大字奥山田小字宮垣内一五〇

天神社

境内社
一間社流見世棚造、銅板葺
江戸前期



天神社は松井の集落の背後の山腹に鎮座し、麓からの長い参道の脇には旧神宮寺・中性院の坊舎の跡とみえる平地も所々のこる。

本殿は、山城地方では例が少ない二間社で建築年代は「田辺町史」等に享保二年（一七一七）とある。様式的には妥当で、装飾が堂々かつ奔放で、絵様の渦は幅が広く活気があり、臺股の足元は力強く踏張っている。

当社は奥山田集落のほぼ中央の宮垣内に鎮座する。
本殿・境内社ともほぼ東面し、境内の奥の一番高いところにある。

谷あいに立地する神童子の不晴谷の東端に位置する。

室町

三間社流造、鉄板葺

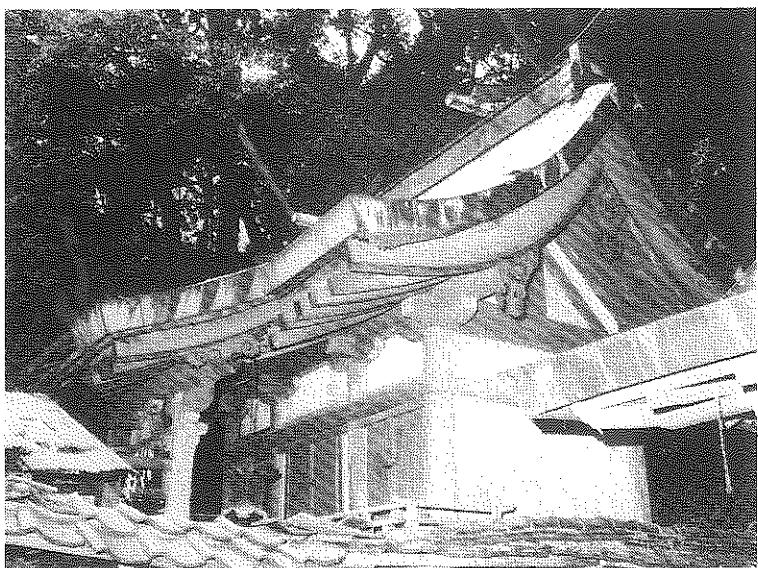
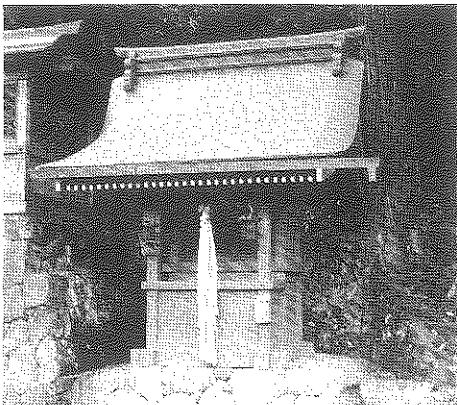
天神社本殿 一棟

相楽郡山城町大字神童子小字不晴谷一七七

(登録)
天神社

境内北側の杉木立のなかに、建治三年（一二二七）銘の十三重石塔があり、重要文化財に指定されている。
本殿は現在までに幾度か改変を受けたようであるが、建築年代は基本的に室町時代に遡るものであろう。反りの大きく雄大な感じのする軒・垂木、舟肘木の形は簡素ななかにも力強さを与える。

本殿は一間社流造であるが、内陣は一間に分け、屋根には千木・勝男木を置く。全体に彩色が施され、若葉・渦・波文様が随所にみられ、両側面には獅子が描かれる。
境内社は本殿の東前方にあり、朱塗が施される。
本殿・境内社とも、蟇股・虹梁・斗拱等細部に古様をとどめたところが多く、造替の際に大工が古殿にならつたものであろう。



松尾神社拝殿・表門及び境内社御靈神社本殿 二棟（登録）

相樂郡山城町大字椿井小字松尾四一
松尾神社

松尾神社

拝殿 衎行五間、梁行三間、切妻造、本瓦葺

桃山、慶長一二（棟木銘）

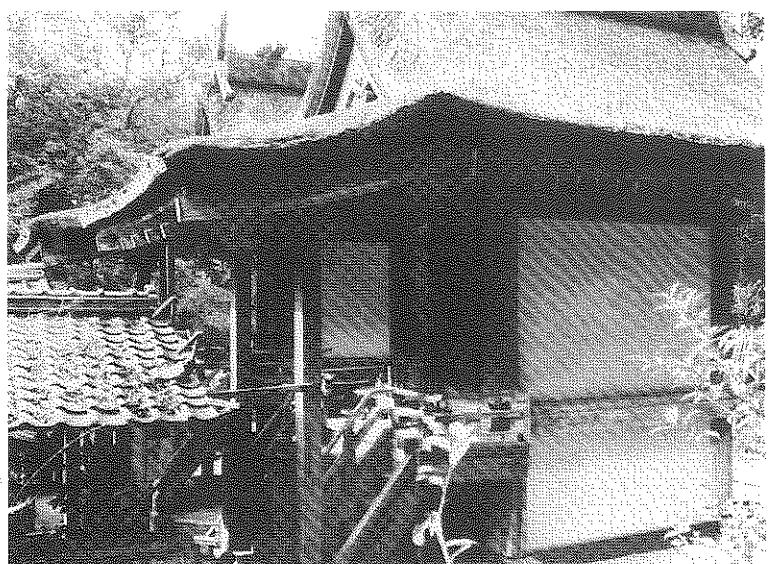
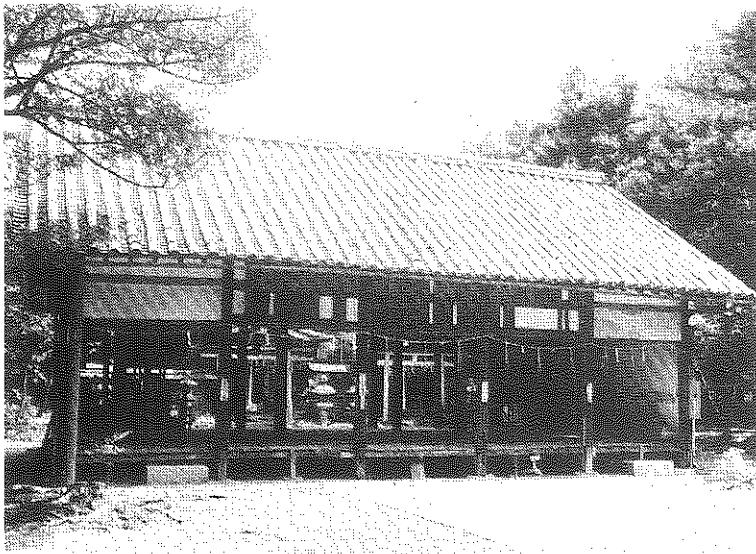
表門 四脚門、切妻造、本瓦葺

桃山

境内社御靈神社本殿 一間社春日造、檜皮葺

江戸・文化五・文政六移（記録）

当社は椿井集落東方の丘陵上にあり、上狹・林・椿井の鎮守社であ



る。

本殿は文化五年（一八〇八）に奈良春日若宮の古殿を移築したもので、春日大社では天明六年（一七八六）の造営になり、重要文化財に指定されている。

拝殿は背の高い、大型の建物で、板敷の床を低く張り、前後を吹放し、両側を土壁とし、天井を張らない当地域ではよくあるつくりである。

表門は四脚門で軒には反りがあり、雄大な感じをうける。柱の面の割合や、社蔵の慶長一四年（一六〇九）の神能絵図に、現在と同位置に四脚門があることから、拝殿と同時期の建立とみられる。

境内社御靈神社本殿は、重要文化財の松尾神社本殿の東に並んで建つ。もと椿井集落南端の御靈山にあつた神社で、明治一三年（一八八〇）に移されてきた。建物は奈良春日大社の本殿を文政六年（一八二三）に移したことが、大社の記録にみえ、年代の確かな春日大社古殿移建例である。



和伎座天乃夫岐壳神社本殿 一棟

（登録）

相樂郡山城町大字平尾小字里屋敷五四

和伎座天乃夫岐壳神社

三間社流造、銅板葺
江戸・元禄五（記録）

平尾集落の東の丘陵部に鎮座する。一夜にして湧出した森の中にあるとの伝承から、湧出宮とも云う。

本殿は、裝飾が華やかで、彩色が施されているので、にぎやかで明るい感じを受ける。庇の幕板には牡丹や竜が彫られ、身舎のものは肩に蓑を付けた形式で元禄らしさをだし、海老虹梁もよく時代の特徴を表わす。

境内社御靈神社本殿は、重要文化財の松尾神社本殿の東に並んで建つ。もと椿井集落南端の御靈山にあつた神社で、明治一三年（一八八〇）に移されてきた。建物は奈良春日大社の本殿を文政六年（一八二三）に移したことが、大社の記録にみえ、年代の確かな春日大社古殿移建例である。

有市国津神社本殿 一棟

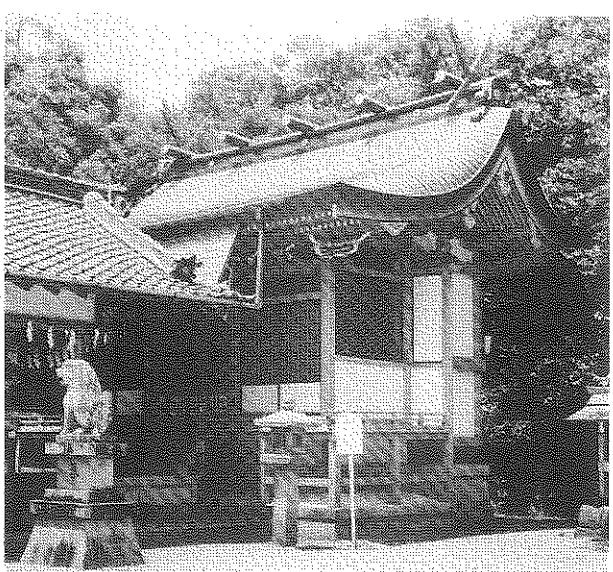
（登録）

相樂郡笠置町大字有市小字平ノ畠五六

有市国津神社

一間社春日造、銅板葺
江戸・元禄三・正徳一移（棟札）

当社は西流する木津川の北岸、有市の集落の東端に位置する。本殿は石垣により周囲とは一段高く位置し、南面する。現本殿は奈良春日大社の旧本殿（第一殿）を移したもので、移転の時期は、社蔵の棟札より正徳一年（一七一一）で、大社では元禄三年（一六九〇）の造當時のものであろう。当本殿は移建例のうち年代の確かなものの古い例の一つである。



武内神社本殿 一棟

(登録)

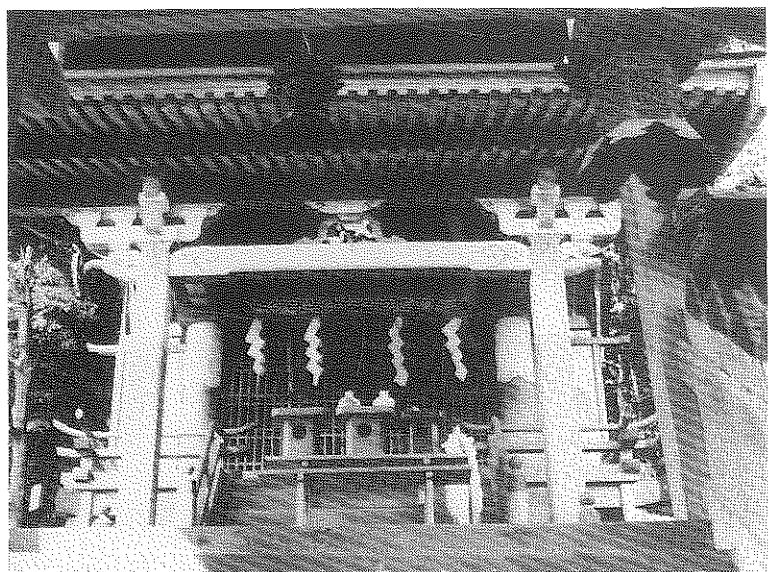
相楽郡精華町北稲八間小字北垣外四七
武内神社

（登録）

一間社流造、檜皮葺
江戸前期

当社は北稲八間の集落の西北に鎮座する。
本殿は全体に彩色が施され、松や雲紋、両側面には獅子が描かれ、
派手な印象を与える。

建築年代は細部様式からみて江戸時代前期とみられるが、各部には



鎌倉・室町・桃山の各時代の意匠を使う等、古様をとどめるところが多い。

六所神社本殿及び覆屋 二棟

(登録)

相模郡南山城村大字野殿小字宮ノ前一

六所神社

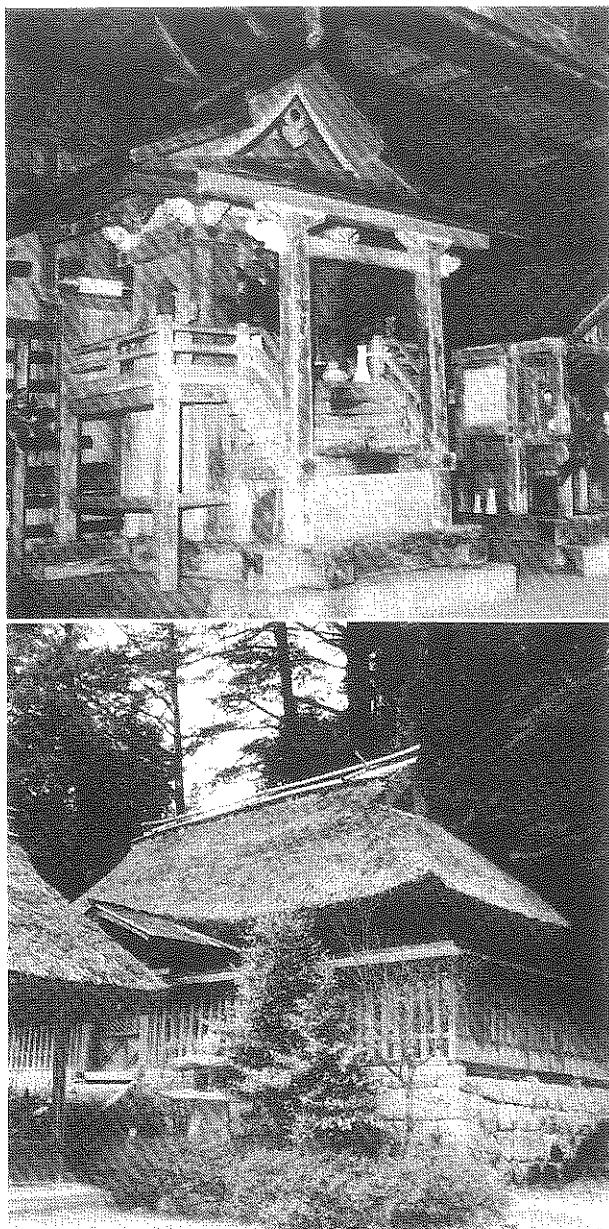
本殿 一間社春日造、板葺
江戸中期

覆屋 桁行四間 梁行二間 入母屋造 茅葺
江戸中期

当社は山中の盆地である野殿の集落の東に鎮座し、森はうつそうとした感じを与える。

神殿は六段あって、石垣を築いた壇上の覆屋内に並立する。本殿は小規模な一間社春日造で、屋根は厚板段葺で、木鼻の絵様や配置は特有のものである。

覆屋は本殿をはじめ六つの神殿を覆う大型の茅葺の建物で、明治期に改修はしているが、江戸時代中期まで遡るものであろう。本殿・覆屋とも例のない形式をもち、興味深い存在である。



鍬山神社本殿及び境内社八幡宮本殿

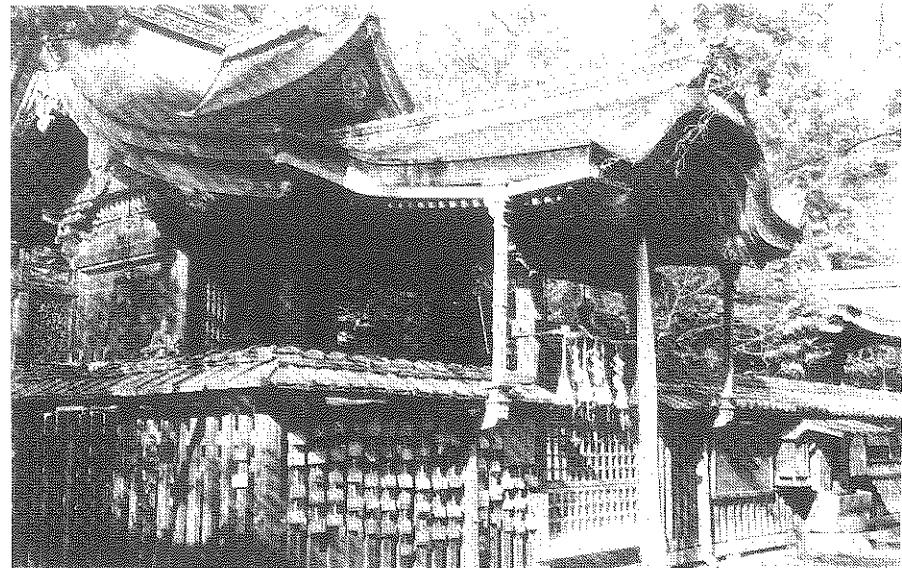
二棟

(登録)

鍬山神社は、鍬山大明神または矢田社といい、延喜式内社に列する。天正一九（一五九一）に領主豊臣秀勝が祈禱料を寄進して以来、歴代龟山城主の庇護を受け、慶長一五年（一六一〇）に現地へ移った。

本殿 一間社流造、正面千島破風付、押所一間唐破風造
境内社八幡宮本殿 同右
文化二年（一八一四）

亀岡市上矢田町
鍬山神社



現在の本殿は文化二年（一八一四）の建立になることが棟札よりわかり、八幡宮も同時期・同形式のものである。大型の一間社流造で、正面に唐破風の押所を接続させている点が特徴で、檜の良材を用いて細部彫刻に至るまで本格的である。

能満神社本殿 一棟

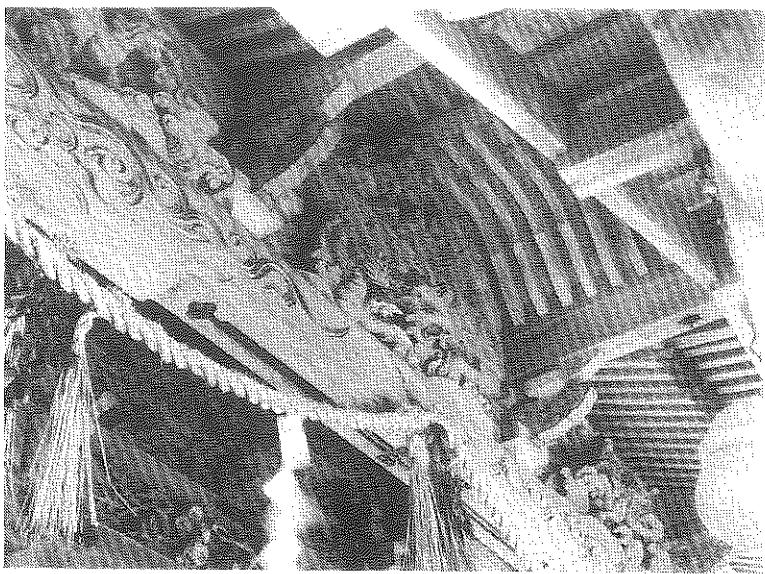
(登録)

船井郡丹波町字上野小字北垣内六三の一
能満神社

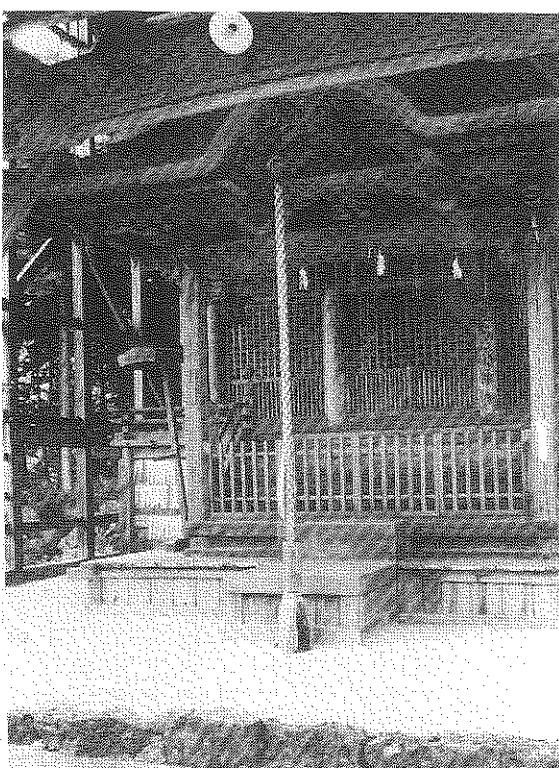
二間社流造、檜皮葺、正面千島破風及び軒唐破風付

檜皮葺

明和四年（一七六七）



能満神社は須知の町の東の平地に位置し、現在の本殿は明和四年の建立で、記録によると、延享二年（一七四五）二月から氏子一人につき毎月一錢文ずつ積み立てをして、工費は銀八貫七〇匁という。本殿の特徴は、彫刻がきわめて多いことで、軒唐破風の下に竜、虎、麒麟を配し、浪彫刻で周囲を埋める。身舎も内法長押より上を、雲、波、花木等の彫刻で埋め、幕脇内には靈鳥類の彫刻を飾つて、全体として強い印象をあたえる建物となつてゐる。



梅田春日神社本殿及び境内社猿田彦社本殿 二棟（登録）

船井郡瑞穂町字水原小字宮ノ下二の三
梅田春日神社

梅田春日神社

本殿 三間社流造、正面軒唐破風付、こけら葺

境内社猿田彦社本殿、三間社流造、こけら葺

本殿 江戸中期

境内社猿田彦社本殿 江戸中期

梅田春日神社は文永年中（一二六四～七五）に大和から春日社を勧請したと伝え、後年に村内の梅田神社を移転合祀して、梅田春日神社と称するという。また、境内の猿田彦社は、以前は梵天帝釤天と称してこの地域一帯の庚申信仰の中心となり、明治までは当村の氏神でも

あつた。本殿の時代は様式的に見て元禄前後と考えられ、海老虹染を鱗に仕上げる等、装飾化がかなり進んでいる点がうかがわれる。一方境内社の方は本殿より時代が少し下がると思われるが、つくりは装飾を抑えた保守的な傾向を示している。

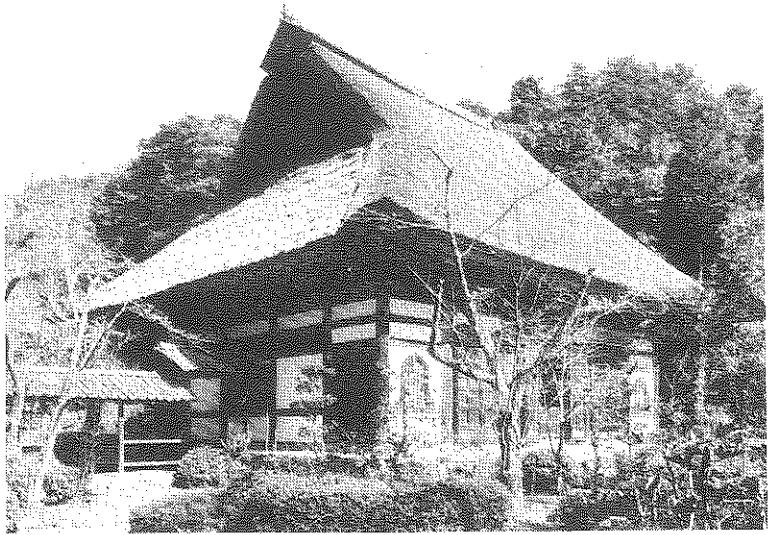
安国寺仏殿 一棟

綾部市安国寺町寺の段一

(登録)

安国寺

桁行五間、梁行五間、一重、入母屋造、茅葺
寛保三年（一七四三）



安国寺は臨済宗東福寺派に属し、はじめ上杉氏の氏寺があつたが、足利尊氏の帰依を得てより全国安国寺の筆頭、後にさらに十刹となつた。境内は茅葺の本堂を中心方に丈、庫裏（茅葺）、表門、鐘楼を備える。現在の仏殿は寛保三年（一七四三）に完成しており、単層の建物であるが、床を四半敷とし、側廻り一間を化粧屋根裏として海老虹梁で繋ぎ、中央前寄りの柱を虹梁と大瓶束で抜くなど禅宗様独特の手法をうまく応用している。

美術工芸品

絹本著色天庵妙受像

白贊がある 三幅

(指定)

絹本著色天庵妙受像 建武五年の年記の自贊がある

絹本著色天庵妙受像 別宗匡侍者の依頼により書す旨の自贊がある

絹本著色天庵妙受像 果□の為に書す旨の自贊がある

一幅

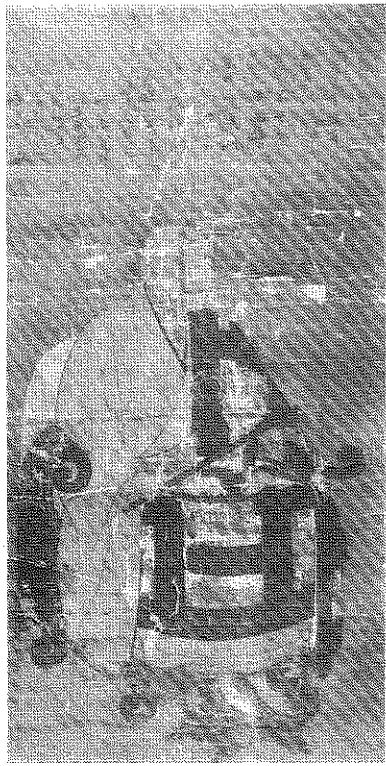
絹本著色天庵妙受像 綾部市安国寺町寺の段一・安国寺

一幅

その一／一〇六・二×五四・三 その二／一〇九・六×五六・四
その三／九九・一×五一・六 南北朝時代

天庵妙受(仏性禪師)は、高峯顯日(仏國國師)の法嗣で、南禪寺等諸寺を歷住したが、康永元年(一三四二)足利尊氏に招かれて丹波安國寺の開山として迎えられた禪僧で、康永四年(一三四五)七九歳で示寂している。三幅とも曲泉に坐わる妙受の姿を描き、妙受の自贊がある。特にその一には建武五年(一三三八)の年記があり、制作年代がわかる。他の二幅もほぼその頃の作と思われる。

自贊のある頂相で、制作年代もほぼわかり、その描写も写実性にす



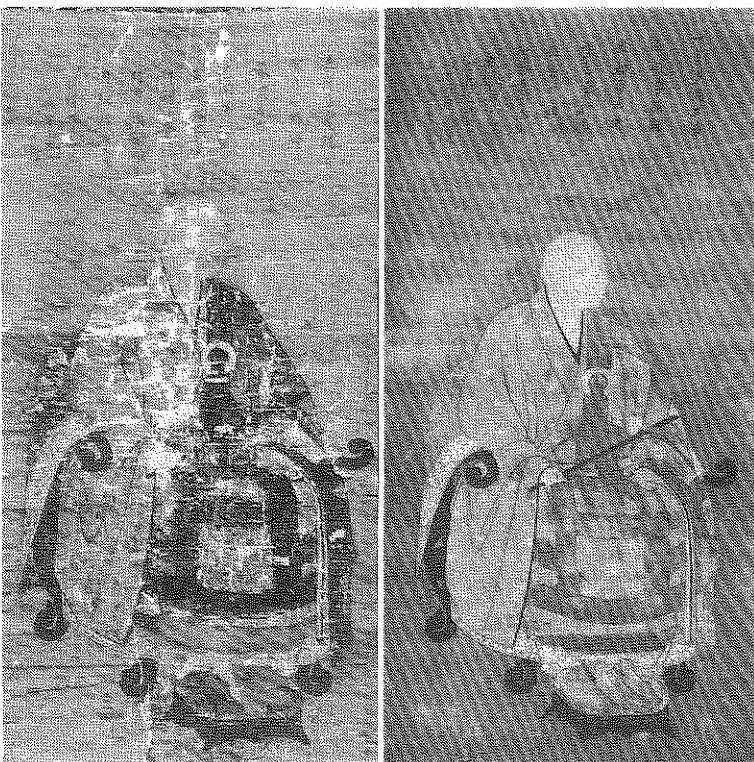
絹本著色当麻曼荼羅図 一幅

(指定)

熊野郡久美浜町一・本願寺

一一〇・五×一七六・八 南北朝時代

当麻曼荼羅は『觀無量寿仏經』に基づいた觀經變相図の一種で、大和、当麻寺の蓮糸曼荼羅継成説話で著名なものであり、奈良時代から伝わる原本も同寺に伝えられている。その後、当麻曼荼羅信仰によつて、数々の転写本が作られるが本図もその一つである。

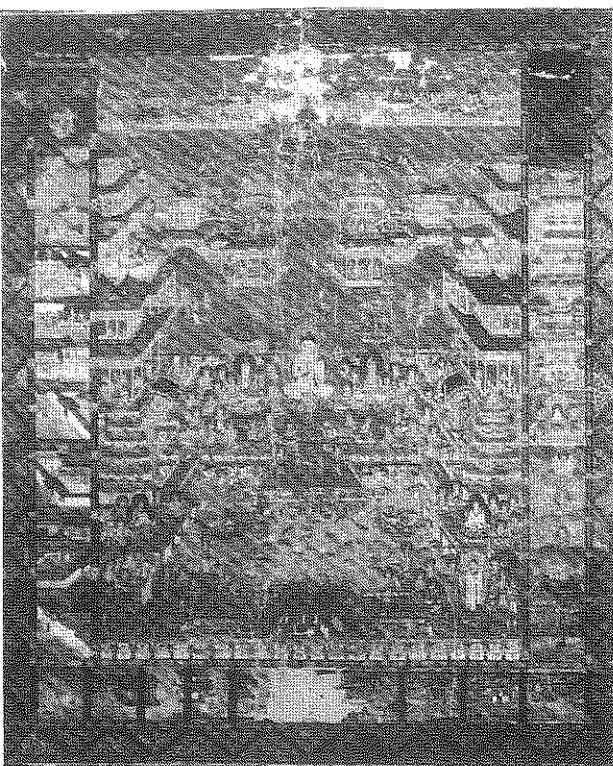


ぐれている点、南北朝時代の頂相の古例として貴重な遺品である。

種であるが、本図はかなり縦長のものとなつてゐる。圖様としては、

原本以来の伝説をひくものであるが、画面の下段に描かれる三輩九品の来迎する聖衆がいずれも坐像であらわされていて、禪林寺本などの諸本と異なり、知恩寺本や当麻寺文龜本と共に通であることが注目される。

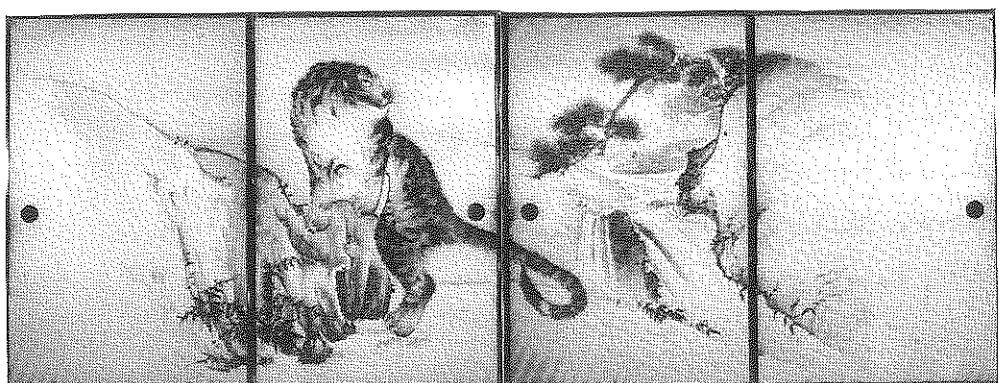
また、その描線は精緻で、彩色も当初のものを良く伝えていて、当代当麻曼荼羅の一典型といふべき佳作といえよう。その制作年代は、鎌倉後期の作風を受け継いでいるが、切金などの表現はかたく、南北朝時代まで下ると思われる。



方丈障壁画 長沢芦洲筆 四十四面

(登録)

附 紙本著色維摩像 長沢芦洲筆、発未之中夏の仏通大円の贊がある
中郡峰山町字五箇小字下山一七九四・慶徳院 一幅





紙本墨画虎図 縞貼付八（室中）一七八・〇×二一六・一（四面）

一七七・五×一 一六・三（四面）

紙本墨画鶴図 縞貼付四（仏間）一七七・八×二一六・三（二面）

一七八・〇×八八・六（二面）

紙本淡彩梅桜図 縞貼付八（上間二之面）一七七・五×二一六・三

（四面）一七七・八×九二・五（四面）

紙本淡彩竹林高士図 縞貼付六・天袋貼付四（上間一之間）

縞貼付一七七・八×九八・五（四面）一七八・〇×八八・六（二面）

天袋貼付二六・八×四四・〇（四面）

紙本淡彩山水図 縞貼付六（下間一之間）一七七・八×九二・五（

四面）一七七・八×八八・六（二面）

紙本淡彩山水人物図 縞貼付八（下間二之間）一七八・〇×二一六・

一（四面）一七七・八×九二・五（四面）

附 一四一・五×九三・〇

江戸時代

長沢芦洲（明和四年＝一七七六～弘化四年＝一八四七）は、円山派の奇才長沢芦雪の儀子で、文化・文政期の京都画壇にあって一家をなし活躍した。

本障壁画は、方丈六室にわたって水墨を基調にして处处に淡彩を交えて描かれており、各図のそれぞれに落款や印章が認められる。

室中の虎図や上間二之間の山水人物図などは父芦雪に倣る見事な出来映えを見せていて、芦洲の円熟期の作と考えられるが、制作年代等は不明である。ただ、附の維摩像に文政六年（一八二三）の贊があり、障壁画の制作年代もほぼこの頃かとも考えられる。

従来、芦洲の作品はほとんど知られておらず、遺品にめぐまれなかつた芦洲の大作がほぼ完全な形で伝えられている事は甚だ貴重である。

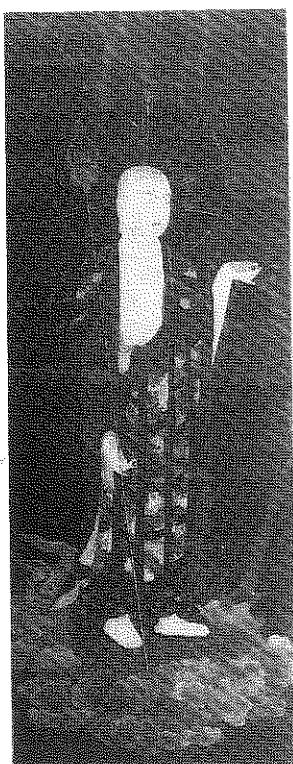
絹本着色釈迦十六善神像 一幅

（登録）

中都大宮町字谷内二四一・二四二一一合地・岩屋寺

縦一〇五・二×横七八・一 鎌倉時代

釈迦十六善神像は大般若經転読の際の本尊で釈迦如來を中心に、それを守護する十六善神を配するものである。その遺例は數多く残されて



絹本着色地蔵菩薩像 一幅

（登録）

中都大宮町字谷内二四一・二四二一一合地・岩屋寺

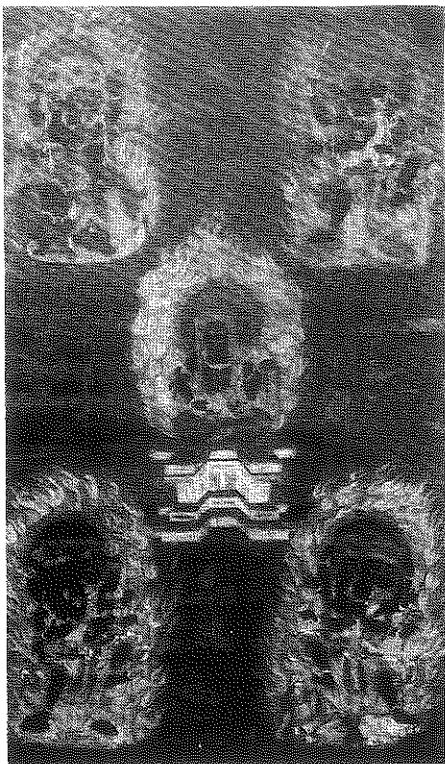
縦二一六・七×横四三・九 鎌倉時代

左手に宝珠を持ち右手に錫杖を持つ地蔵菩薩が雲に乗って来迎する



姿を描いた、いわゆる地蔵来迎図である。地蔵来迎図は平安後期以来数多く描かれた阿弥陀来迎図の影響を受けて成立したもので、鎌倉時代以降流行し、類品も多い。

本図も鎌倉時代の一般的傾向に従つたものであるが、保存状態も良く、作風も鎌倉後期の特徴を良く示している。



絹本着色五大尊像 一 幅

附 旧軸木 寛元四年正月十三日の銘がある

(登録)

中都大宮町字谷内二四一・二四二一一合地・岩屋寺

五大尊像 縦一二〇・四×横七〇・五

附 旧軸木 軸長八五・八 軸径三・一 鎌倉時代

五大尊像

五大尊像は、不動明王を中心として降三世・重茶利・大威德・金剛薬叉の四明王を配するもので、本図のように五尊を一幅に描くもののが、五幅に描きわけるものである。

本図は、先年の修理の際に、軸木から寛元四年（一二四六）の年記が発見され、注目されたが、軸木は途中切断され、他材を補つており、当初の軸木はどうか不明である。むしろ、その作風からすれば、画像の制作年代はやや下る可能性もある。

絹本着色毘沙門天像 一 幅

中都大宮町字谷内二四一・二四二一一合地・岩屋寺
縦一一八・一×横五七・八 鎌倉時代

左手に戟、右手に宝塔を捧げ、二童子と眷属を従えて立つ毘沙門天像を描く。

そのきれいに整理された描線、金泥を多用する彩色からみて、鎌倉後期の制作と思われ、当代天部画像の典型的な作例といえる。



木造俊笏律師坐像 一 輛

像高六二・八 鎌倉時代
京都市東山区泉涌寺山内町二七・泉涌寺
(指定)

泉涌寺の開山俊笏律師（月輪大師）は、肥後に生まれ、律の修業をして渡宋した当代の傑僧である。本像は、その姿を等身のほぼ三分の二に写した肖像で、この方式は鎌倉時代の禅宗肖像彫刻（頂相）には多く見受けられるものである。桧材を用いた寄木造りで玉眼を入れ彩色するが現状はほとんど剥落している。俊敏な面相は師の没後もない頃に造られたことを示し、衣の襞は簡素で力強く刻まれ、しかも

（軸木墨書き銘）
南無（切斷部）如來南无阿彌陀佛 沙弥圓成口 寛元四年正月十三日



大らかさを十分にそなえていて、鎌倉時代の肖像彫刻の典型を見ることができる。

木造薬師如来坐像 一軀

相楽郡木津町大字鹿背山小字鹿曲田六五・西念寺

全高九五・五

像高五三・一 平安時代

右手を施無畏印とし、左手に薬壺をとる通例の薬師像である。

本体の構造は、後世の厚い漆箔のため不詳であるが、頭体を通して

前後二材矧ぎと思われ、仮体と蓮肉を共木すると思われる。

台座は九重蓮華座で束以外は当時のものと思われる。蛤座や上・下

框には宝相華文様が彫出されている。その作風は、和様彫刻の一典型

というべきもので、体軀の均衡は調和がとれ、量感も誇張に走らず、

おだやかな表現をみせる。台座の蛤座などにほどこされた宝相華文も

平安以後期の特色を示している。ただ、面相の表現で、目鼻立ちの造

作が多少小造りとなり、また衣文の襞も浅く細かくなるなど、総じて

繊細さへの傾向をみせはじめており、制作年代は十二世紀の早い頃ま

(指定)



で下げるのが穩当ではないかと考えられる。

なお、本像は、西念寺からほど近い奈良県中川の興福寺別院であつた中川成身院旧蔵と伝えられるが、その古様な技法と合せて考えてみれば、平安後期の奈良仏師の作と考えることも可能であり、奈良文化圏の彫刻様式と技法をつかがわせる資料としても注目される。

いずれにしても、本像は像容の整った和様の一典型として貴重であることは勿論として、台座のほとんどを完存する保存のよさも特記さ

木造金剛力士立像 二軀

北桑田郡美山町大字静原小字孤段二〇ノ一 欽樂寺

阿形

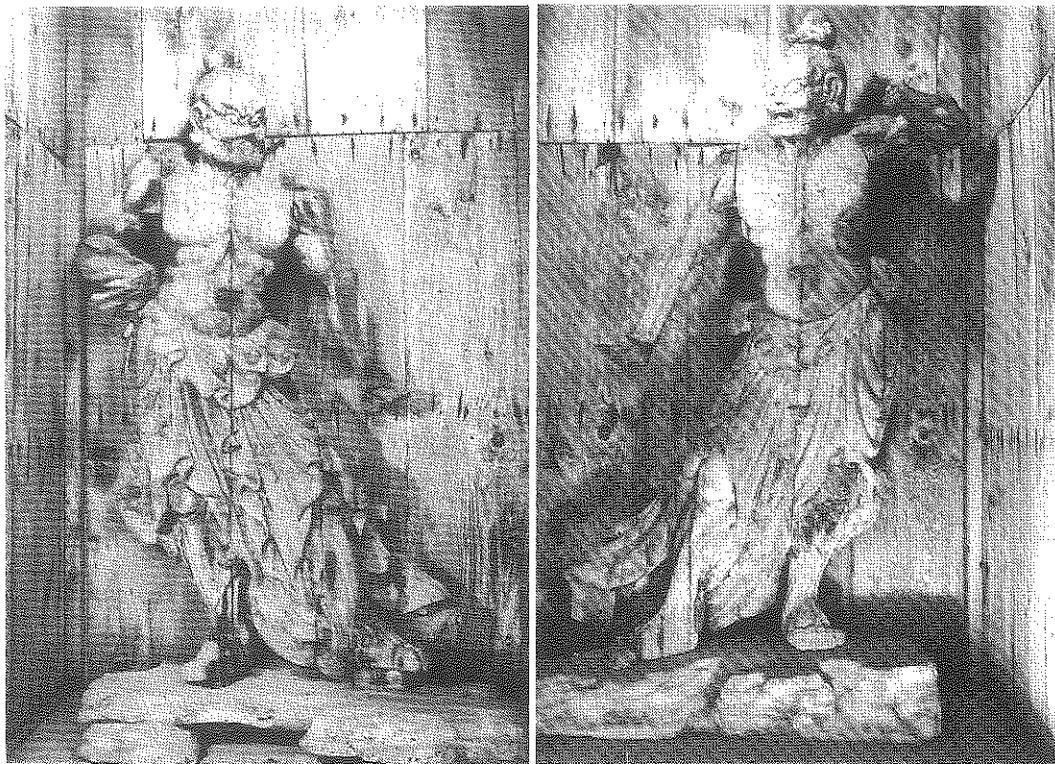
全高一九六・四

像高一七九・五 鎌倉時代

(指定)

鎌倉時代に間々みられる等身大的、いわゆる仁王像で、この種のもととしては小品であるが、制作の優れた一例として推賞しうるものである。忿怒の眼鼻立ちも筋肉描写もまた緻密くたたまれた衣褶も深く、

切れ味よく刻まれよどみない。つよく腰を捻り、裳裾をなびかせた運動感も整った体躯の均衡と共に鎌倉時代の優れた面をよくあらわして



木造如意輪觀音坐像 一軀

像底に永仁六年三月七日、大仏師安阿流法橋賢清の銘がある

龜岡市西堅町六五・宗堅寺

像高 一〇〇・二 鎌倉時代（永仁六年＝一二九八）
作者 法橋賢清

六臂をそなえ右膝を立てて坐る通形の姿である。両足部裏面の墨書によると永仁六年（一二九八）法橋賢清が造立し、もと本寺の末寺である妙樂寺の安置仏であった。賢清は安阿流を称しており、当代に活躍した快慶の系譜に連なる仏師と考えられるが、本像の作風は、面貌

いる。制作は、鎌倉時代も前半まで遡るであろう。阿吽いずれも頭・体を通して正中線と両側で矧合せた四材が根幹をなし、これに両手や足等を矧ぎつけている。材は桧材と思われ、彩色はほとんど剥落して、現在像の表面は古色を呈している。
雨露にさらされて表面の損傷は著しいが、後補部はごく一部にすぎず、足下に踏まえる洲浜形の岩座まで当初のものをのこしているのも貴重である。

や衣文の處理にみられるよう宋風の影響の強いものである。

本像の作風は、貞応三年（一二二四）の肥後定慶作の京都市上京区大報恩寺如意輪觀音像（重要文化財）建長八年（一二五六）頃の京都市下京区・透玄寺像（重要文化財）などの遺品に繋る要素が強いが、これらの像に比すれば硬化沈滞の感が強いといえる。

しかしながら、六臂の複雑な構成や体軀の造型に無難なまとまりをみせ、保存も良好な点、当代の基準作例として注目される。

（像底墨書）

永仁六年戊戌三月七日丹波国桑郡河人郷□村妙樂寺造作之上无上菩
提中四恩下三遼衆生為也□子生山觀音大仏師安阿流法橋賢國弟子
春大願主金剛仏子義圓

木造一山國師坐像 一軀

（登録）



附 像内納入品

一、舍利 一包

一、略記 一紙

一、厨子 一基

京都市左京区南禪寺福地町・南禪院

七六・〇・鎌倉時代

一山一寧（一山國師）は中國南宋時代に台州に生まれた。その後、元の時代、外交使節として世宗の命により正安元年（一二九九）渡日し、建長寺に住し、正和二年（一二一三）後宇多上皇の命により南禪寺第三世となつた。

この像は、一山がひらいた大雲庵に安置されていたものが、その廃絶後、南禪院に移されたものと思われる。像内に、一山の遺骨と言い伝えられるものが厨子に納められており、没年をあまり隔たらぬころの、鎌倉末から南北朝初め頃造立されたと思われる。その単純化された穏やかな表現のなかに一山の個性を写実的にあらわす作風も、この頃の制作を裏付けている。

桧材、寄木造、玉眼嵌入としているが、構造は現在厚い後補の彩色におおわれていて不詳である。

木造釈迦如來及両脇侍坐像 三軀

（登録）

畿部市安國寺町寺の段一・安國寺

秋迦

一五九・五 文殊 八一・六 普賢 八一・七 南北朝時代

仏殿に安置される当寺の本尊で、髪を結い法界定印を結んで坐る周丈六の宝冠釈迦如來像を中心、両脇に文殊・普賢を配する三尊像である。本寺はもと光福寺と称し、鎌倉後期から足利尊氏の母方の上杉一族の帰依を受け発展した。暦応元年（一二三三八）尊氏は元弘の乱以来の戦死者の鎮魂及び國家安泰を祈願して諸国に安國寺建立を發願したが、丹波国はこの光福寺があてられ安國寺と称されるようになった。康永元年（一二四二）南禪寺の天庵妙受が開山として招かれ臨済禪刹として今日に至るが、禪宗本尊形式をとる本三尊像が祀られたのはこ

梵鐘 一口

(指定)

正應元年十月十八日、大工橘則弘の刻銘がある。

京都市上京区出水通六軒町西入七番町三三一・華光寺

総高一〇一・八 口徑五七・〇 鎌倉時代(正應元年一一八八)

作者 橘則弘

鎔銅製。もと愛宕護山別院丹州巖辺寺の鐘として鑄造されたが、近世華光寺に入ったものと思われる。

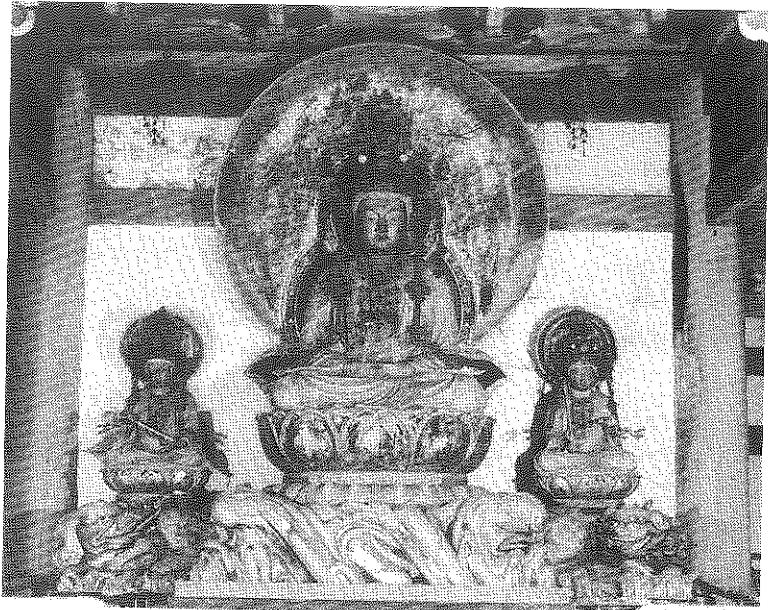
本鐘は京都市内の未指定の梵鐘としては最も古い年紀をもつものであり、府下においても加茂町海住山寺鐘(正嘉元年一一五七)に次ぐものである。

作者の橘則弘は、鎌倉後期、京都を中心に活躍した橘姓をもつ鎔工の一人である。

本鐘は大きさ、作とも鎌倉時代の平均的な作例であり、その年記の古さ、また橘姓をもつ鎔工の現存作品として貴重である。

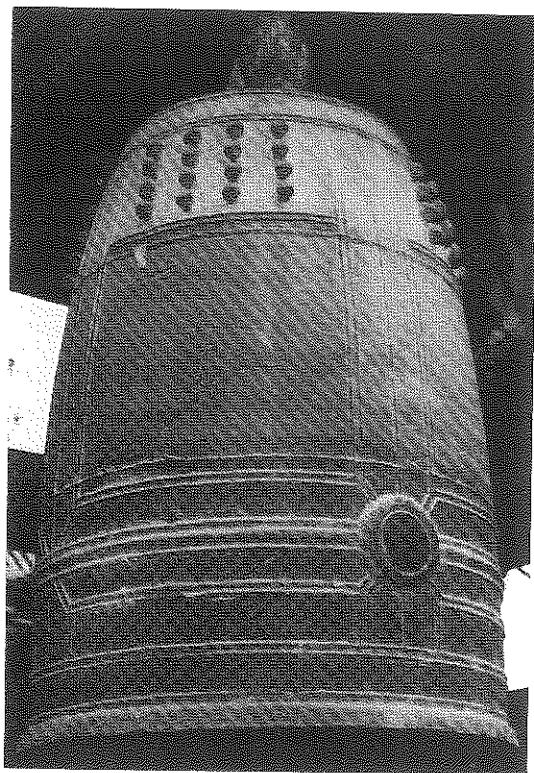
〈第一区銘文〉

愛宕護山別院/丹州巖辺寺鐘/正應元年十月/十八日庚午鑄/大工橘則
弘/祝願打始沙門信鑄



の頃以降であろう。

各像は寄木造り、玉眼嵌入、肉身金泥、衣部彩色仕上げとする。全体にまとまりはよく、面貌は俗化しながらも品位を失わず、法衣の縫や襞の扱いも繁雑にはしらず節度を保っている。様式上、南北朝時代に位置づけてよく、遅くとも本寺が京都十刹に列せられた応永二一年(一四一四)以前の制作と考えられる。当地方のみならず全国的にみてもこの頃の出来の良い大作として注目される。



梵鐘 一口

(指定)

永仁四年十月五日、大工内蔵範頼の刻銘がある。

京都市左京区花背原地町七七二・峰定寺

総高八五・五 口径五〇・一 鎌倉時代(永仁四年)一一九六)

作者 大工内蔵範頼

鋳銅製。阿波國金剛光寺の鐘として鋸造され、寛正六年(一四六五)に河内國広隆寺に買い取られ、よく文正元年(一四六六)に峰定寺に貰いとられた事が銘文からわかる。

作者の内蔵範頼については詳らかにできないが撞座の形式からおそらく河内鋸物師の系統に属する鋸工と推察される。

本鐘は、鎌倉時代の梵鐘としてはやや小振であり、一部にひび割れもあるが、鋸技に見るべきものがあり、鎌倉時代の持徵をよくあらわした形姿のよい優作といえる。

(第一区銘文)

阿波國以西郡八方/金剛光寺鐘 願主/三部阿闍梨耶夷秀/永仁四年歲次丙申十月五日/大工内蔵範頼

梵鐘 一口

(指定)

嘉元四年正月二十六日、鋸師河州旦南治部入道淨仏の刻銘がある。

京都市山科区御陵平林町二三一・安祥寺

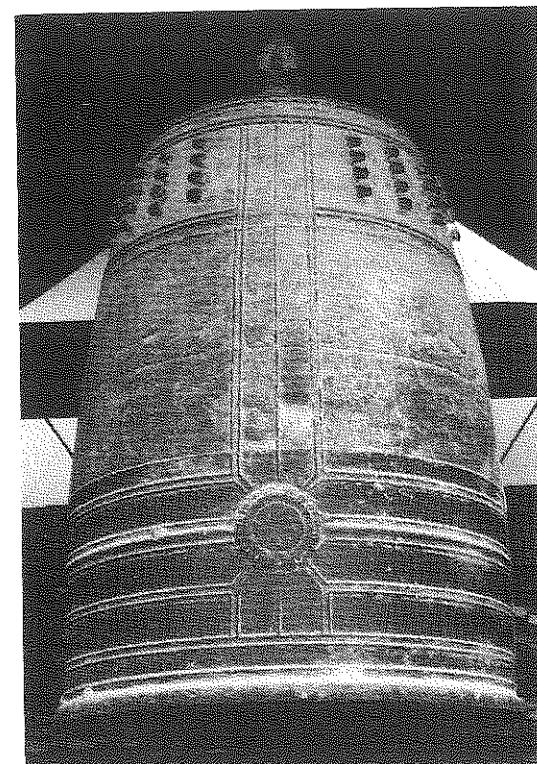
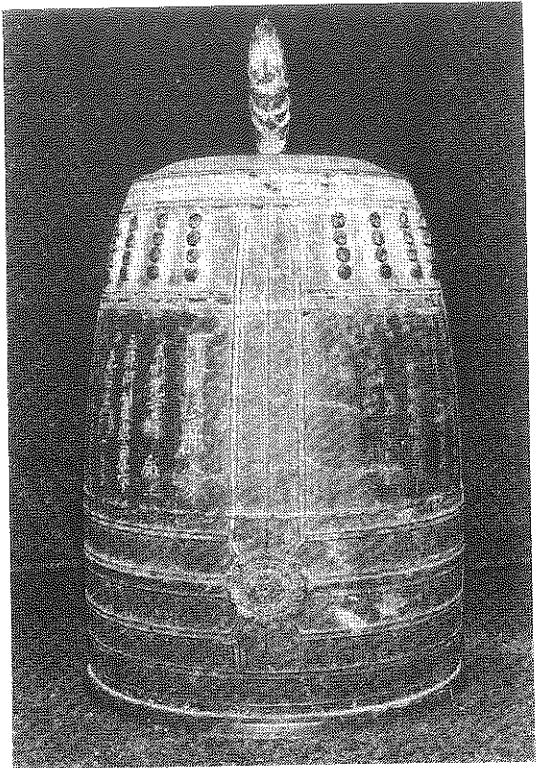
総高一〇九・六 口径六一・一 鎌倉時代(嘉元四年)一一三〇六)

作者 河州旦南治部入道淨仏

鋳銅製。摂津渡辺の安祥寺の梵鐘として鋸造されたが現在安祥寺に伝わる鐘である。作者の河州旦南治部入道淨仏は、河内鋸物師の本拠地である丹南郡、すなわち丹比郡(現在の大坂府松原市付近)の鋸工である。本鐘は、鎌倉時代の平均的な法量を有し、その形姿は鎌倉時代の典型的なもので、また鋸上りも良好な優品である。

(第一区銘文)

攝州渡辺安祥寺洪鐘一口/右為驚覺三世諸仏濟度一切衆生/園諸人之助成作一口之洪鐘宜為/一寺之重宝永伝万代之不朽而已/嘉元四季歲次丙午正月廿六日/大勸進法橋上人位印昭/願主沙弥蓮阿并助成諸人等/鋸師河州旦南治部入道淨仏



梵鐘 一口

建武二年二月三日の刻名がある

(指定)

梵鐘 一口

正喜元年十月九日、鑄物師丹治国忠の刻名がある。

(指定)

宇治市白川川上り谷七三・地蔵院

相樂郡加茂町大字例幣小字海住山二〇・海住山寺

総高一四三・〇 口径七九・四 南北朝時代(建武二年—一三三五)

総高五八・八 口径三四・〇 鎌倉時代(正嘉元年—一二五七)

鑄銅製。地蔵院の前身といえる金色院伝来の梵鐘である。金色院は、

藤原頼通の女の寛子が康和四(一一〇二)年に創建した名刹で、地蔵院には、他にも金色院伝来という名宝がいくつか伝わっている。

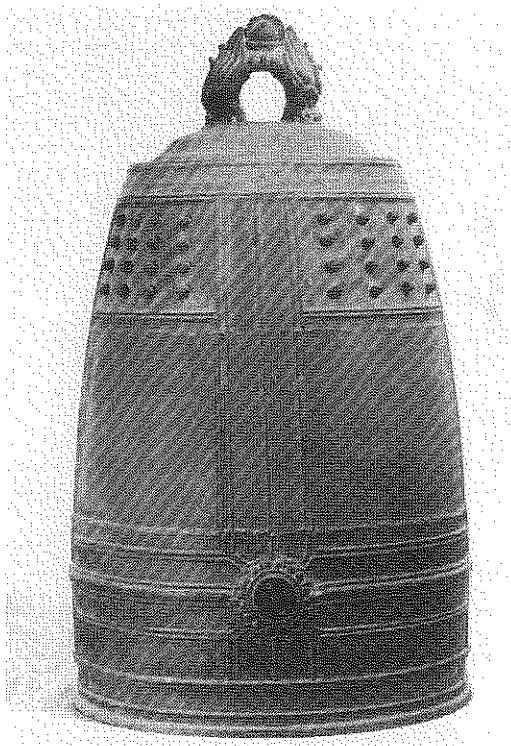
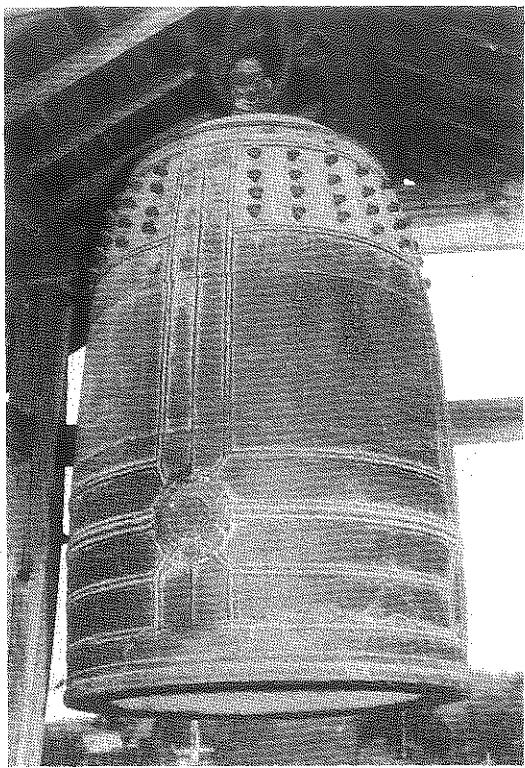
铭文は、寺名と年紀のみを記した簡潔な表現になつてゐるため作者は不明である。

本鐘は鎌倉時代のものに比べると形姿がややくずれ、竜頭なども簡素になつてゐるが、この時代のものとしては大型で重量感のある梵鐘であり、また金色院伝来という由緒のある遺品としても貴重である。

(銘文)
金色院／建武二年乙亥二月三日

鎌倉時代の鐘としてはかなり小形のものであるが、竜頭の長軸線と前後二個の撞座を結ぶ線が直交する古式の形式を伝えており、全体に形姿、作共とも良くなっている。当代の梵鐘の様式編年上基準作例にふさわしい内容を持つ美作である。

(銘文)
修禪院別院／無量寿院鐘／正嘉元年十月九日／院主印玄 鑄物師丹治国忠



梵鐘 一口

(指定)

応長二年二月三日、大工藤原近行・粟田未定の刻銘がある。

相楽郡精華町大字柘榴小字垣内七一・極楽寺

総高七九・〇 口径四七・五 鎌倉時代(応長二年(一一二二))

作者 藤原近行・粟田未定

鎌銅製。當時からほど近い山田の伊王寺の鐘として鋳造されたものである。

作者の藤原近行と粟田未定については詳しいことは不明であるが、両者とも山城の鍛物師と思われる。

本堂は、鎌倉時代のものとしてはやや小型であり、一部に鋸むらが見られるが、その形式や形姿には鎌倉時代の特長が良く示されている。

(銘文)

(一区) 注進山城國相樂部／山田伊王寺／大願主僧定意／大工藤原近行／

大工粟田未定

(二区) 奉加／沙弥尼生駒／若女 影宗／沙弥得念 僧榮舜／僧聖算／
沙弥尼 慈阿／応長二年壬子二月卅日

梵鐘 一口

(登録)

天文十一年十月十八日、大工三条藤原国久の刻銘がある

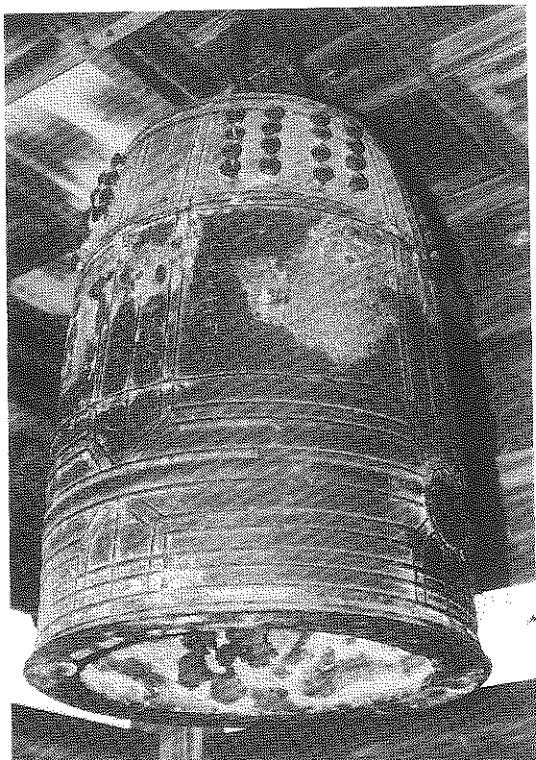
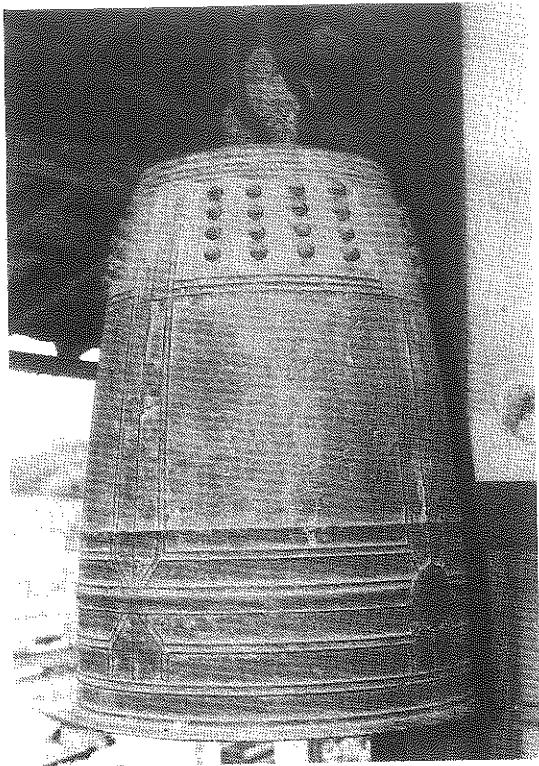
龜岡市本梅町平松中野垣内一八・桂林寺

総高一〇〇・〇 口径五七・四 室町時代

鎌銅製。もと桂林寺の付近にあつたと思われる天王寺の鐘として鋳造されたものである。

銘文によれば、天文一一年(一五四二)、三条笠座の鍛物師藤原国久の作という。ただ、この銘文は鋸膚のくずれもあってかなり配列が不規則なものとなっている。

銘文に今後検討を要する点もあるが、室町末期の梵鐘の一資料として貴重な遺品といえよう。



熊野十二社權現懸仏 二面

(指定)

熊野郡久美浜町宇田頓寺七二七・円頓寺

その一 鏡板径五四〇

その二 鏡板径三一〇

円形の銅製鏡板に、鋳銅製の十二体の仏菩薩・明王天部などを配す。現在は十三体のうちその一は五体、その二是四体欠失する。二面とも

熊野十二社權現懸仏と考えられる。

熊野十二社權現の本地仏を曼荼羅図様に配した懸仏は遺例にきわめ

石造御正体 四面

亀岡市旭町西島一〇八・真神寺

(登録)

(面径) (1)如来形御正体 二一・八

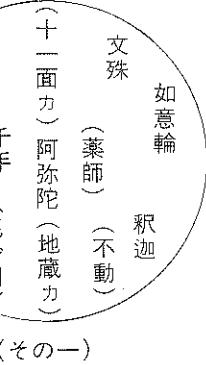
(2)十一面觀音御正体 二一・五

(3)如來形御正体 二一・九

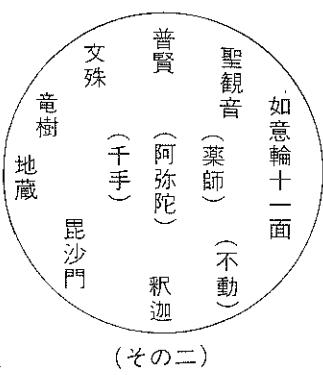
(4)菩薩形御正体 一九・〇

て乏しく、重要文化財に指定されているものも二面だけである。

当寺の二面の懸仏は、必ずしも保存状態は良好とはいえないが、大型の懸仏で鍍金を施された各尊像も鎌倉時代の特徴が良くあらわされており、さらに同種の遺品が極めて少ないこともあいまつて貴重な作例といえる。なお、参考として現状の尊像の配置を示しておく。



(その一)



(その二)

(一) 内は欠失

鎌倉時代

各石造（砂岩）・漆箔仕上げとする。

寺伝に従えば、春日五宮の本地仏をあらわした御正体である。

各々、三石より円形の鏡板を造り出し、それに像・台座などを彫りしたものである。

像などはかなり丁寧に彫出しており、彫技に見るべきものもあるが、何よりも御正体の材質としては特異な石造という点に注目すべき貴重な遺品である。

十一面觀音懸仏三〇・八

大日如來懸仏三一・一

南北朝時代（元弘元年）（三三一）

各木造（桧材）彩色仕上げの懸仏である。円板に別材製の尊像を木釘で留めた懸仏である。各面とも裏に元弘元年十月十三日から十一月三日にかけての墨書銘がある。

木造の懸仏は、ままみうけられるが、本懸仏はその中でも注目すべき遺品といえよう。ただ近世の粗悪な彩色を施され、像容がそこなわれているのが惜まれる。

（銘文）

（祝迦）元弘元年辛未十月十三日／沙弥覚定

（十一面）元弘元年辛未十月二十五日／沙弥覺定

（大日）元弘元年十一月三日／沙弥覺定

（登録）

木造懸仏 三面

裏に元弘元年、沙弥覺定の墨書銘がある

船井郡園部町南大谷寺ノ下一・淨光寺

（面径）秋迦好米懸仏三六・四



懸仏 一三九面

附 懸仏残欠 三七個

(登録)

天庵妙受遺偈 一幅

中行

(指定)

船井郡日吉町字中世木小字宮前一三・普門院

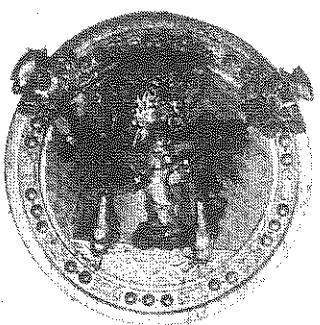
面径四・三・一九・八 鎌倉・室町時代

当普門院に伝わる懸仏は銅板鏡を含め一三九面にのぼり、しかもな

お三七個の残欠が確認されている。その多くは独尊構成のもので、三尊構成のものは阿弥陀三尊二面、

薬師三尊一面のみが確認されている。また、各尊像の尊名の確認は困難なものがほとんどであるが、現状で確認できるものでは、薬師七面、

藏王権現五面、阿弥陀四面などである。



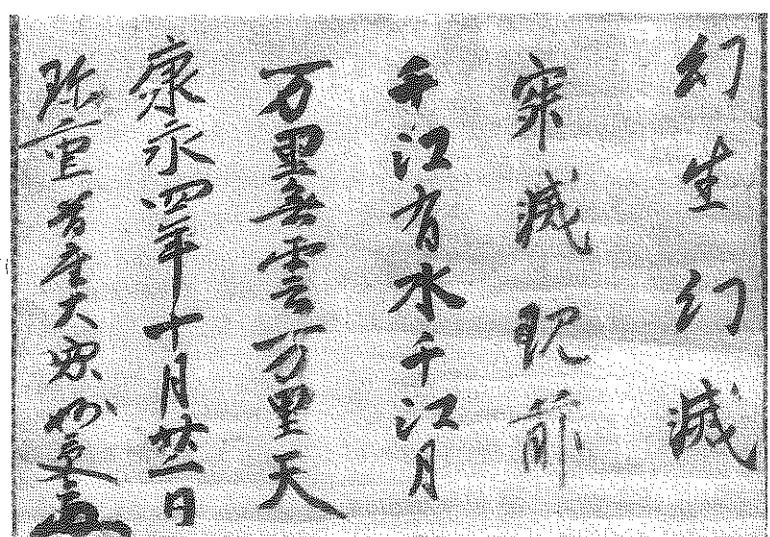
縦二七・〇 橫三八・二

南北朝時代(貞和元年(康永四年)~一三四五)

安国寺の開山である天庵妙受が、その生涯を終るにあたって、当寺の首座大衆に書き残した偈(詩)である。

妙受は高峰顯日(仏国禪師)の法嗣で、のち入元し、帰國後、鎌倉万寿寺、京都真如寺、南禪寺に歴住し、康永元年(一三四二)に足利尊氏に招かれ、安国寺の開山となつた。

綾部市安国寺町寺の段一・安国寺



銘文を有するものは三一面を数え、年紀は文和三年(一二五四)から寛正六年(一四六五)にわたっている。また銘文に「三十八所」を記すものが十八面あり、これらの懸仏群の制作の背景には金峯山信仰が大きな比重をしめていたことがわかる。

当時に伝存する懸仏は、総じて小形であり、簡素な手法によるものがほとんどであるが、このように多量の懸仏が一括して伝存していることの貴重性は勿論、中世の信仰資料としても注目すべきものである。

この遺偈は、妙受七九歳のもので、各行不揃いで乱れた筆致は臨終の近いことを思わせる遺偈特有のものである。本遺偈は、当代の代表的な禅僧の墨蹟として、また丹波安国寺の由緒を物語る代表的な遺品の一つとして貴重である。

（本文）

幻生幻滅 寂滅現前 千江有水千江月 万里無雲万里天 康永四年十月

一一日 珍重首座大衆 妙受（花押）

安国寺文書（七十四通）五巻・三幅

附 古記録 一冊

綾部市安国寺町寺の段一・安国寺

（指定）

心寺院であつた安国寺の寺格にかかる文書もいくつかみえる。これ以外で特記すべきものは、足利尊氏の母である上杉清子の仮名消息で、類例少ない南北朝時代の女性消息文として著名なものである。さらに、安国寺絵図は、安国寺の往時の規模を伝えた縦界図である。

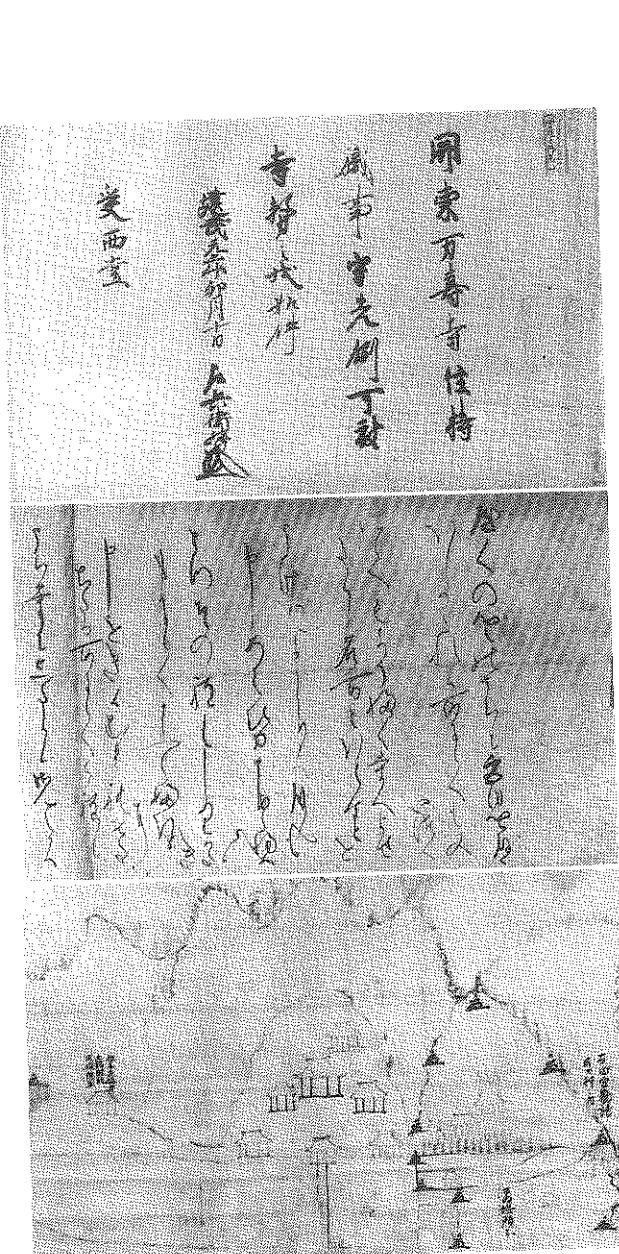
世絵図上注目される遺品である。附の古記録は、安国寺に伝わった文書を近世に書き写したものであるが、この中には現在すでに散逸したものも書き写されており、安国寺の歴史を知る上で貴重な遺品である。

附 古記録 江戸時代

安国寺は、丹波何鹿郡上杉庄にあり、その前身は足利尊氏の母方上杉氏一族の氏寺光福寺であつたので、足利歴代将軍の崇敬が厚く、文保元年（一三一七）八月二日比丘尼心会議状を上限として永祿九年（一五六六）二月十八日義将請文に至る七四通の中世文書を存している。

寺領に関するものを中心に、足利歴代将軍の御教書類や丹波の中

心寺院であつた安国寺の寺格にかかる文書もいくつかみえる。



阿良須神社文書（十六通）三卷

（登録）

舞鶴市小倉小字フル宮一三・阿良須神社

南北朝時代～江戸時代

阿良須神社には、現在三巻の文書が伝えられている。第一巻は中世文書巻で、觀応元年（一三五〇）三月二十三日志榮庄春日部村政所堺基宛行状を始めとして南北朝、室町時代の文書十三通（他に一通、江戸時代の文書がある）を存している。いずれも阿良須神社の前身と思われる一宮の神社領の伝領を示すものであるが、内容は同社の経営行事等のあり方を伝えていた。中世庄園における神社に関する伝来稀な史料として貴重である。

第二、第三巻は、いずれも近世における当初の縁起類である。第二巻は、年記はないが、内容からみて明暦四年（一六五八）に同社の社殿を再建した時の造立願文である。第三巻は、同社の神子尾上氏の先祖の口伝書を写した一宮の縁起である。

なお、第一巻は舞鶴市立郷土資料館に寄託されている。

舞鶴市立郷土資料館蔵

春日部村人志榮庄春日賀譲等
合意証

右田内侍官主御送達印と申す事
令領此青白略目證言退院可承故付者也
印根更無有相應傳授被呈之與人謀与
于他所之候事と有祐領此等件免例
令勒引下候知行納下承れ
觀應元年三月廿三日

無形文化財

黒谷和紙（工芸技術）

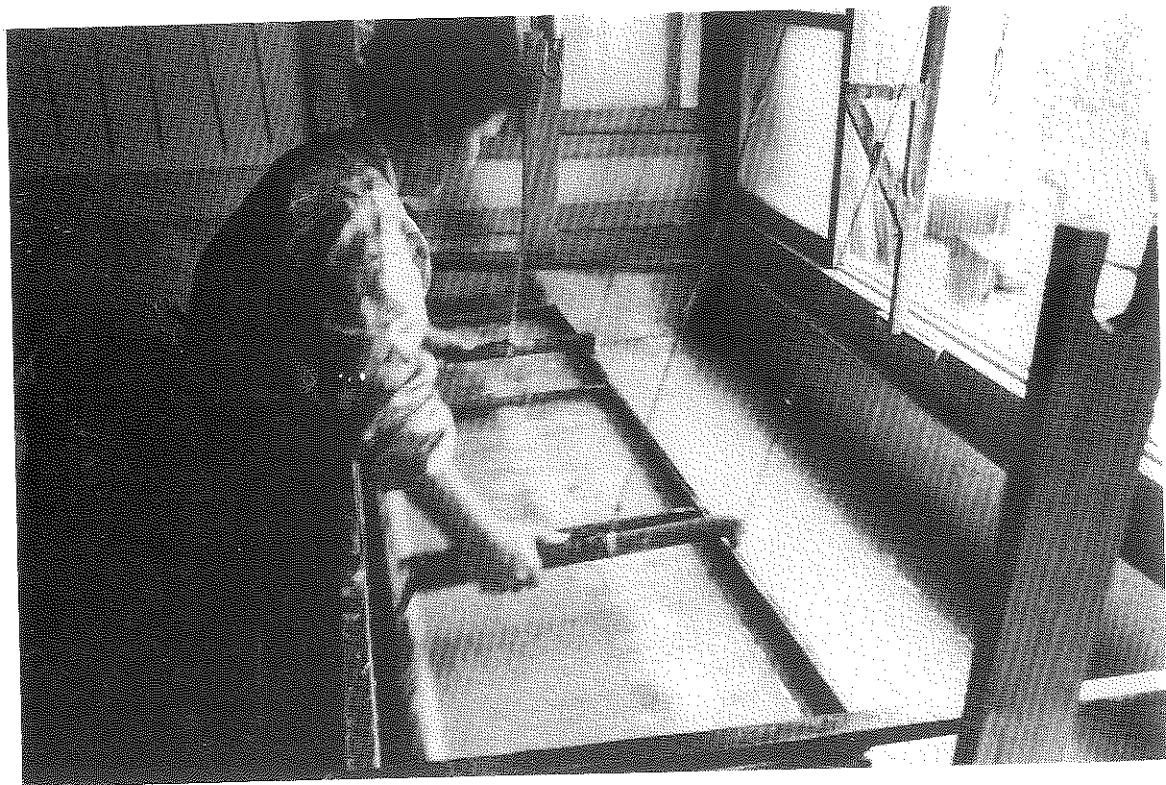
（指定）

綾部市黒谷町黒谷和紙会館内

黒谷和紙保存会

黒谷和紙は、平家の落人川上某がこの地にかくれ住んではじめたものと伝えるが、世に現れたのは江戸時代に入つてからで、元禄頃（一六八八—一七〇四）には領主（旗本・十倉谷家）が資金を貸し付けてその振興をはかつている。その後しだいに発展し、金紙などの厚地紙を中心にして生産するようになり、寛政二年（一八五五）頃から京都へも進出した。しかしその質が四国の紙に劣っていたため、技術を導入して質的向上につとめ、やがて京呉服に関連した値札、渋紙、畳紙などで知られるようになり、その他にも金紙や障子紙など各種の和紙を生産していた。近代に入り和紙の需要が激減するなかで、里谷和紙も衰退したが、伝統的な手漉和紙の技法を生かしながら、近代的意匠を取り入れた民芸品に活路を求め、今日では書物や版画用紙、葉書、便箋、染紙、小間物加工製品など、多種多様の和紙を製作し、バラエティに富むものとなっている。

製紙法はまことに原始的で、カゴ（楳）を原料として、煮熟（草木灰使用）、水洗（二回）、叩解・抄紙（ねりにトロロアオイやノリウツギを使用する流し漉き）、乾燥（松や銀杏の干板による天日干し）など手のかかる伝統的手法を守つており貴重である。



無形民俗文化財

棚倉の居籠祭
(じろうまつり)

(指定)

棚倉の居籠祭保存会
相樂郡山城町平尾小字里屋敷
和伎座天乃夫岐壳神社内



これは二月一五日から一七日の三日間、和伎座天乃夫岐壳神社（通称・涌出宮）で行なわれるもので、イゴモリの名のとおり、本来は神を迎えるため、氏子があげて忌み籠るところに特徴のある祭である。そのイゴモリの習俗はすでにすたれていますが、数多くの祭事は嚴格な宮座の制によって古儀を伝え注目される。その「もりまわし」にはじまる一連の祭事は多岐にわたるが、中心となるのは、十五日夜の「門の饗応」「松明の儀」、十七日昼の「饗応の儀」「御田植」であり、また、いまなお他見を許さない夜毎の「野塚祭」、十七日深夜の「御供炊き・四塚祭」といった神事である。それらは内容的に宮座の座札と予祝儀礼というふうに区分できるが、全体として、宮座祭祀の中世的な特色と、神を迎える人とが交流するという祭りの本義を今に残すものであり、基盤的な生活文化の特色を示す事例としてきわめて重要である。

田原の御田・かつこすり

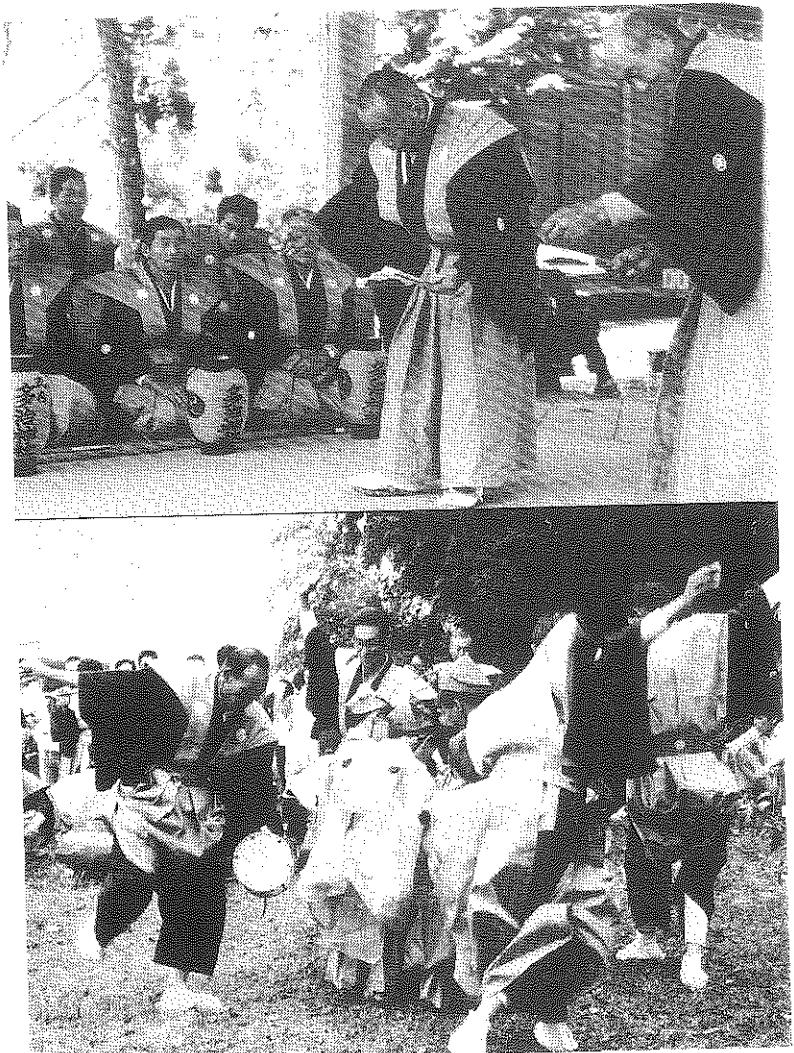
(指定)

多治神社民俗芸能保存会
船井郡日吉町田原多治神社内

この芸能は宮座によつて伝承され、多治神社の祭礼に行なわれてきたものである。

御用は、作太郎・作次郎と呼ぶ立人二人が中心になり、「日柄改め」から「刈終い」まで稻作の過程を一五の次第に分つて模擬的に演じるもので、五月三日に多治神社拝殿で行なわれる。少年の扮する牛や四人の少女による早乙女も登場しなはだ具体的なところもあるが、全體として立人の即興的な対話で進行する特異な御田である。こうした軽妙な演出を持つものは他に類がなく、また内容的にもいかにも中世的な田植歌を伝えるなど貴重な伝承であり、重要である。

かつこすりは、かつこすり四人、さんやれ四人、踊り子大勢が四人の稚児を中心に輪になり、笛・締太鼓のはやしで踊るもので、十月十五日の秋祭りに神輿の渡御に従い、御旅所その他で行なわれる。その踊り歌もきわめて古風であり、全体として小歌を主とする風流踊に先行する形態を伝えるものとして重要である。



松尾寺の仏舞

(指定)

野中の田楽

野中文化財保存会

舞鶴市字松尾・松尾寺内

竹野郡弥栄町野中

この仏舞は、松尾の村人が伝承し、松尾寺の五月八日の花祭に演じられてきた芸能である。光背つきの仮面をすっぽりかぶつた六人の舞人（ホトケ）が奏樂に合わせて舞う優美な舞で、本堂の一隅に敷かれた二畳のうすべりを舞台にして行なわれる。府内には他に類のない貴重な伝承であり、法会樂として芸能的にも価値の高いものである。



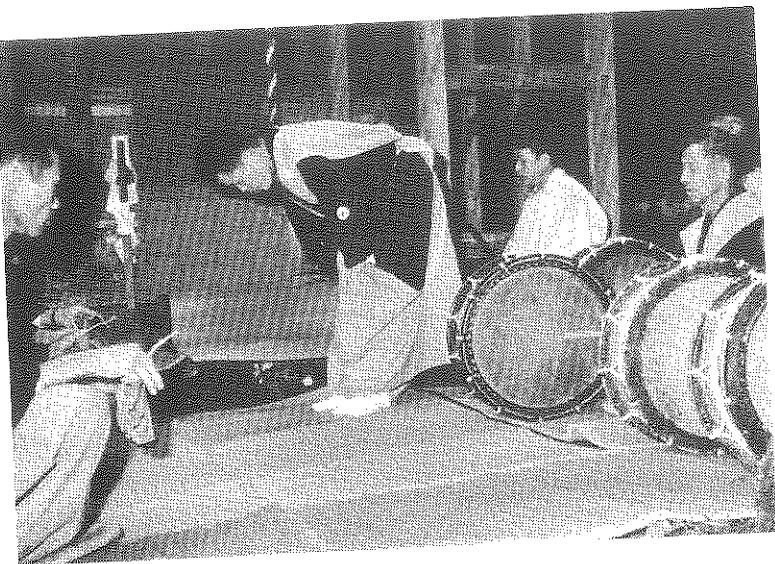
この田楽は、宇野中として伝承してきた芸能で、大宮神社の十月十日の祭礼に奉納される。女装の少年によるビンザサラ四人・手拍子一人と青年による太鼓四人が笛・鼓のはやしで演じる田楽躍で、①飛び開き②ハグタミ、③ササフ踊り（オリワゲ）④手踊り⑤扇の舞（ユリ舞とも）とよぶ基本芸態がある。輪になる動きこそ見られないが、二列並立、座替え、あるいはビンザサラをさまざまに使う振など田楽躍の特色をよく残しており、芸能史的にも価値の高い伝承であり重要なである。

(指定)

櫻原の田楽

(登録)

櫻原田楽保存会



この田楽は櫻原の氏神・川上神社の十月十日の祭礼に奉納されるものである。ここには鉦講とよぶ九人衆の講があり、その九人衆が田楽を勤めるということになっている。その構成は、ビンザサラ四人、太鼓四人、笛一人で、川上神社のほか山の神などでも行なわれる。動きはきわめて単純なものであるが、鳥とびと称する振などもあり、田楽躍の特色を残している。

犬甘野の御田

(登録)

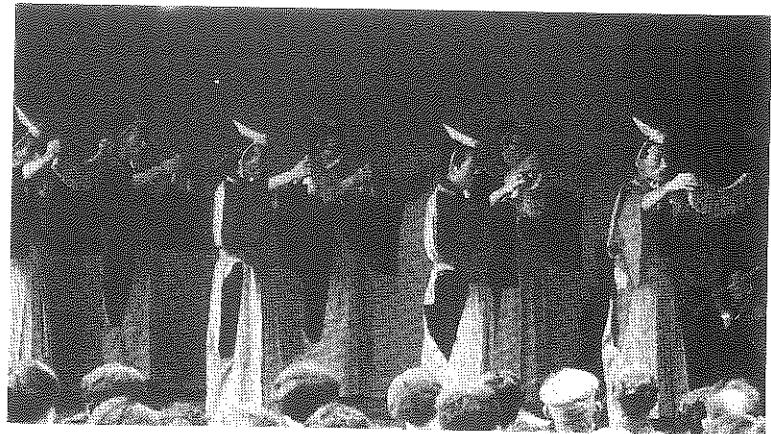
亀岡市西別院町犬甘野
犬甘野御田保存会



この御田は、犬甘野の人々が伝承し、氏神・松尾神社の祭礼（現在七月第一日曜日）に行なわれる。内容は①田まわり②代かき③田植の次第から成り、早乙女、アトシ、牛使い等によつて模擬的に演じるもので、上下に分かれる本殿前の広場を田に見立て、まず上段（上のマチ）、ついで下段（下のマチ）で同様にくり返される。内容的には単純であり、田植歌も失なつているが、田植の二段構成や特異な牛の表現など特色ある御田として貴重である。

天座の田楽

あまさき



天座文化財保存会
(登録)
福知山市天座

福知山市天座

この田楽は、紫宸殿田楽と同じく御勝八幡宮の大祭に際して、天座として奉納してきたものであり、踊り手三人が左右にとぶ「鳥トビ」、「ピンザサラ」十二人が列立して演じる。「ピンザサラ」二人が相舞をみせる「猩々舞」から成る。「鳥トビ」と「ピンザサラ」は田楽躍、「猩々舞」は能舞を伝えたものであり、貴重である。なお、現在は天座の氏神・大歳神社の例祭に行なうようになつてゐる。

野条の紫宸殿田楽

ししんでん

上野条無形文化財保存会
(登録)
福知山市上野条

福知山市上野条

この田楽は、近郷七カ村の総鎮守ともいへべき御勝八幡宮の二十五年めごとの大祭に奉納される芸能の一つで、上・下野条が伝承してきしたものである。踊り手はピンザサラ十二人、太鼓方一人、笛方二人で、他に前立と称する甲冑武者姿のもの一人と、山伏姿のもの一人が付く。ピンザサラと太鼓方は上・下野条の男子が勤めるが、その他の役は特定の家筋の男子が勤めることになつてゐる。列立する踊り手が互いに背合せになつたり、横にとんだり、輪になつたりする動きには、田楽躍の特色がよく残されており、田楽の芸態をうかがわせる貴重な伝承である。



大身のヤンゴ踊

(登録)

大身ヤンゴ踊保存会
天田郡三和町大身

このヤンゴ踊は、大身の氏神・広谷神社の祭礼に行なわれるもので、十月八日の宵宮に境内のチヨウノヤで演じられる。その内容は、笛一人、太鼓一人、ビンザサラ三人で構成される田樂躍で、それが二組編成され、前後二回に分けて行なわれる。芸態としては、笛を中心輪舞するばかりであるが、田樂躍の基本はよく残されており、貴重である。



市野々の菖蒲田植

(登録)

市野々菖蒲田植保存会
熊野郡久美浜町市野々

この菖蒲田植は氏神・天満神社の五月五日の祭礼行事とされるものである。青年達の歌う田植歌に合わせ、輪になつた少年達が中に積まれた菖蒲をつかんでは空高く投げ上げるというものである。その時、「しょんぱりしょんぱり田植」と唱えるので、しょんぱり田植とも呼ばれている。田植らしい形式はみられないが、丹後地方に今日まで伝承された唯一の御田植神事系の行事であり、歌われる田植歌は中世歌謡に共通するところのある貴重なものである。



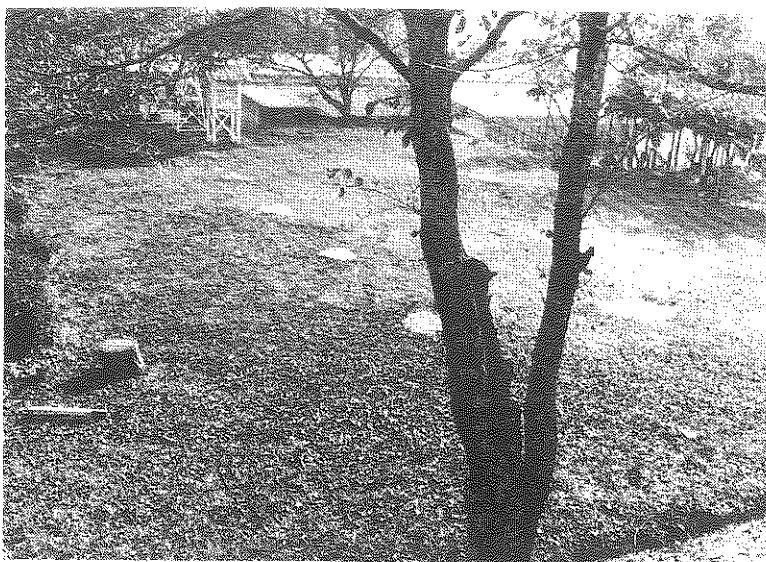
史跡名勝天然記念物

周山廃寺跡附窯跡

(史跡・指定)

北桑田郡京北町大字周山小字中山・小字大山

周山の地は交通路の分岐点であり、水陸の交通の要衝である。この周山の東部、南にひらけた周山中学校校庭に周山廃寺跡が存在し、南方約1km、大堰川西岸山林斜面に窯跡が位置する。



(廃寺跡)



(窯跡)

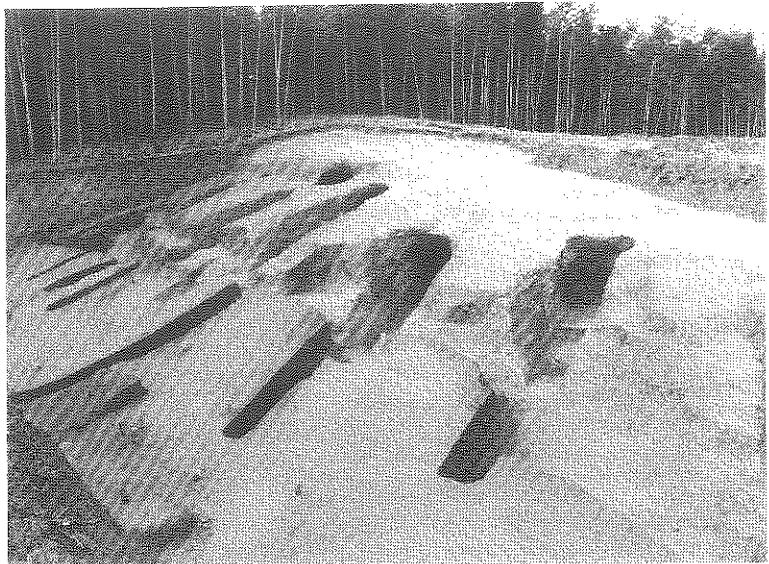
廃寺跡は、第二次大戦直後に発掘調査され、塔跡・東堂跡などの遺構が検出され、東堂跡の礎石は現在も遺存している。出土遺物は、奈良前期（白鳳期）の複弁蓮華文軒丸瓦「□田部連君足」とへラ書きした文字瓦などの瓦類・鏡・風鐸・鐵磬・土器である。この遺跡は、丹波地方最古の寺院跡の一つとして初期仏教文化の地方伝播、地方豪族の仏教受容を知る上で大変重要である。

窯跡は、昭和五十六年の発掘調査によって1~4号窯の四基の窯跡ないし灰原を検出し、中でも1、2号窯は保存状態が良好で、2号窯の煙道は側面に存在する特異な構造である。この窯跡は瓦須須器の双方を焼成する瓦陶兼業窯で、ここで焼かれた瓦が周山廃寺へ供給されている。

狐谷横穴群

(史跡・指定)

八幡市大字美濃山小字狐谷ほか



男山丘陵の東側、ゆるやかな傾斜地のこの地域は、本横穴群の他、美濃山・女谷・荒坂・松井・掘切横穴群など横穴の集中するところで、ある。本横穴群は、昭和五十七年府立南八幡高校新設に伴う発掘調査によつて八基の横穴が検出された。横穴は砂礫のもろい堆積層に南東に開口してほぼ等間隔に築造されており、未調査の他の三基とあわせて一支群を構成している。各々の横穴の形態は、奥壁に向かつて広がる長台形、断面アーチ形で玄室長は二・五mから三・五m、玄室幅は一・〇mから一・六m(奥壁部)である。玄室の床面が墓道より高

い横穴もあり、各横穴を結ぶ道が想定されることが注目される。出土

遺物は十五体以上の人骨・須恵器・土師器・金環・鉄刀などである。

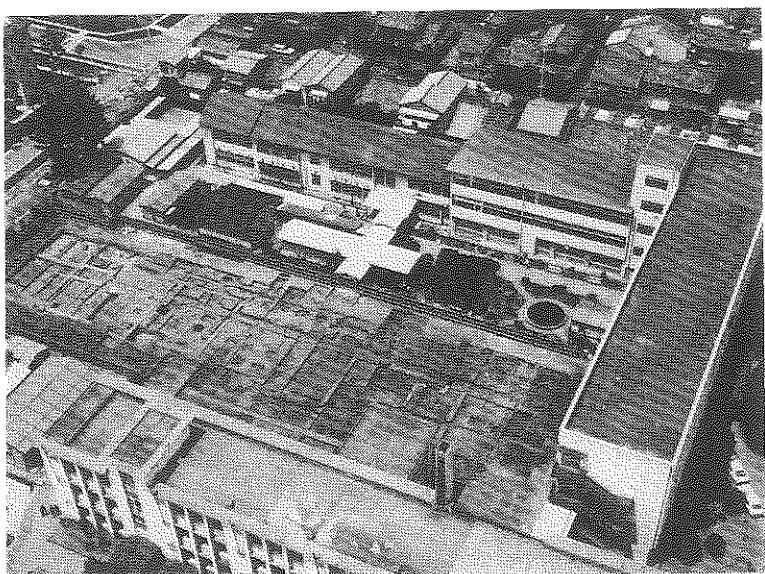
これらのことより判断して六世紀末から七世紀初頭にかけての築造と考えられるが、その後も追葬や二次利用がなされている。横穴は府下ではこの地域の他、丹後地方にも散見するが、群構成・構造・副葬品・保存状態などから本横穴群は屈指のものである。

平安京右京一条三坊九町遺跡

(史跡・指定)

京都府北区大将軍坂田町

本遺跡は、府立山城高校の南北の校舎にはさまれた中庭に存在し、



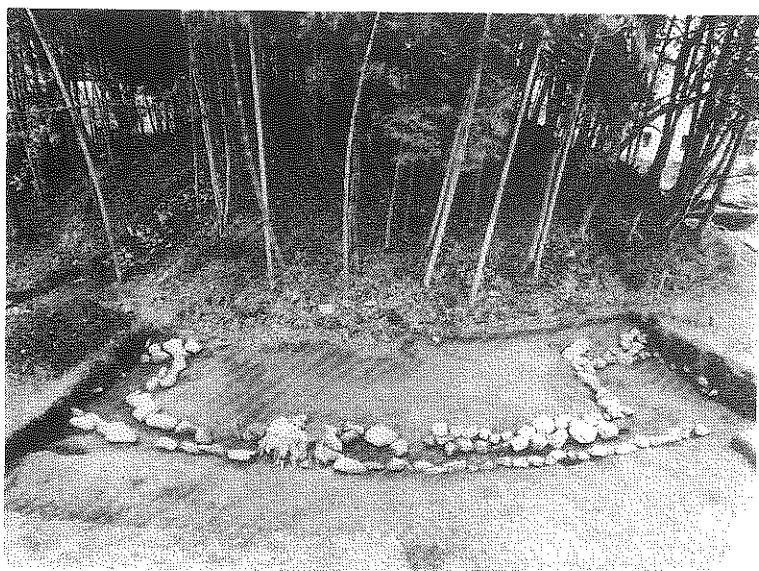
平安京三条坊地割からすると、右京一条三坊九町に相当する。昭和十五年府立山城高校改築に伴う発掘調査により、のちの寝殿造へと変遷する、左右対称の大規模な建物遺構を検出した。遺構は時代的には複合するが、その主要な遺構の時期は、出土瓦、土器などから九世紀初頭ごろのものと考えられる。これの遺構はすべて掘立柱建物で、東西棟三棟、南北棟四棟があり、その内に二棟づつの両面廻建物・片面廻建物がある。邸宅の人物を特定することはできないが、平安時代初期の高位貴族にかかる邸宅遺構として他に類例を見ない重要なもので、建築史上も出色のものである。

なお、遺構は埋戻し後、一切構築物を設けず保存されている。

後野円山古墳群

（史跡・指定）
与謝郡加悦町大字温江小字尾ノ上ほか

本古墳群は野田川の東岸、東より舌状に張り出した丘陵北端に立地し、昭和五十四年ライスセンター建設に伴って発掘調査が行なわれた。二基の古墳より構成される。1号墳は径三一m、高四・七mの円墳で、二段築成、周濠を有し北側周濠内に短い造り出しを持つ。墳丘には葺石を置き、墳頂部に方形の埴輪列が想定され、周濠内から水鳥形埴輪が出土した。内部構造は確かめられていない。2号墳は一辺一七m、高三・七mの方墳で周濠を有す。墳丘には葺石を置き、埴輪列も存在したことが推定されている。内部構造は一基の竪穴式石室で、完掘されてはいない。以上のことより、本古墳群は五世紀後半の築造と考えられ、大型円墳と方墳が連接して築かれていることや前者に造り出しが付設されるなど特異な存在であり、古代加悦谷における在地勢力の消長や畿内古墳文化との比較をする上でもきわめて貴重な遺跡である。完全保存されていることも特筆される。



黒部銚子山古墳

(史跡・指定)
竹野郡弥栄町大字黒部小字久我谷

本古墳は、竹野川右岸、東から舌状に張り出した丘陵端部に立地す

る大型前方後円墳で、墳丘は丘尾を切断して構築され、葺石・円筒埴輪の存在が知られている。規模は、全長一〇五m、後円部径七〇m、

高一五m、前方部幅四五m、高一〇mを測り、前方部は東南を向く。

高一五m、前方部幅四五m、高一〇mを測り、前方部は東南を向く。



型前方後円墳の典型的な姿をとどめ、丹後地方の古代豪族の勢力や府下の古墳文化を知る上で大変重要な古墳である。

なお、昭和四十九年には弥栄町の史跡に指定されている。

湯舟坂2号墳

(史跡・指定)

熊野郡久美浜町大字須田小字鳥の奥

谷の奥部に立地する。この伯耆谷には総数百余基の古墳が群集し、お

のの小支群を形成するが、湯舟坂古墳群は二基からなる。この2号

古墳は、昭和五十六年圃場整備に伴って発掘調査され、墳丘は復元長一

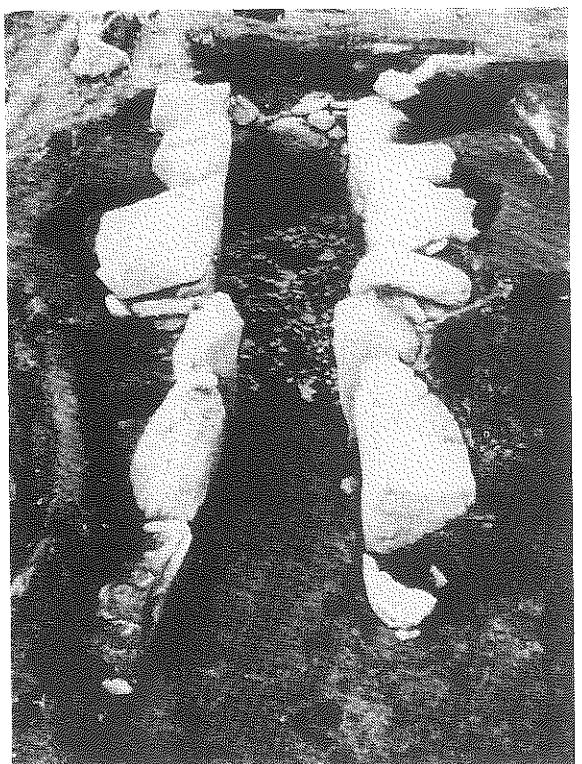
七・五mの円墳で、裾部には列石をめぐらしていることが明らかにな

った。内部主体の横穴式石室は、花崗岩の巨石で構築され、両袖式、

南東に開口、全長一〇・六m、玄室長五・七m、玄室部幅二・一m

(奥壁部)一・二・五m(袖部)、羨道幅一・三m、玄室部には敷石を有

し、側石は二段まで遺存している。出土遺物は、金銅装環頭大刀、銀

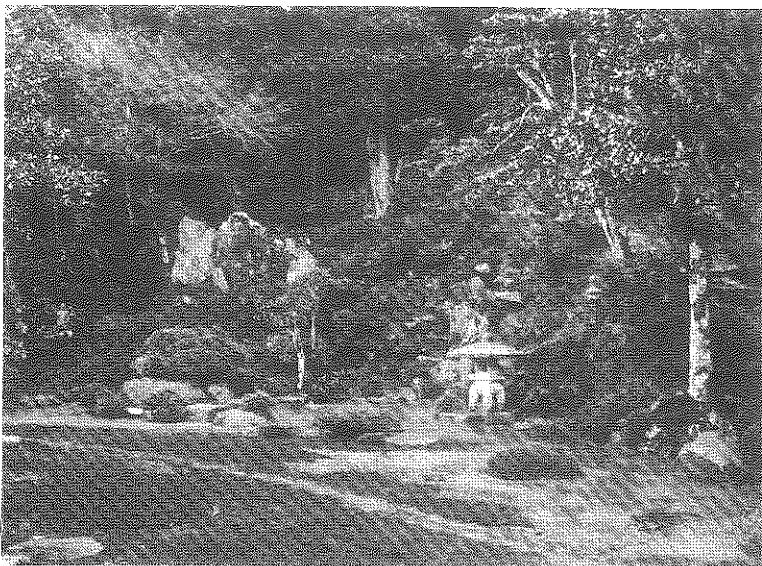


装主頭大刀などの武器・馬具・金具、金環等の装身具・銅鏡・三百余の須恵器・土師器などである。これらの副葬品から判断して本古墳は六世紀後半に築造され、七世紀前半まで追葬が行なわれたと推定される。石室こそ完存していないが、環頭大刀等の多彩な副葬品の出土により府下の後期古墳を代表するものといえ、当地域の古墳文化を知る上で欠かすことのできない遺跡である。

江西寺庭園

(名勝・指定)

宮津市大字須津小字中西ノ谷
臨済宗妙心寺派大寂山江西寺は、寺伝によると慶安三(一六五〇)



年の開山で、寛政年間(一七八九—一八〇〇年)三代文山和尚の時、伽藍、庫裏等が整えられたと伝える。

書院南庭で山裾の平坦地にはもともとは池が作られていたとのことであるが、現在は埋めたてられて全体として枯山水庭園となっている。山畔部には多数の石組をほどこし、枯滝を構成する。特に目立つのは、東寄りの数個の巨石で、屹立する岩盤を表現しているようで迫力があり、本庭の要となっている。滝石組等には後世の改修が認められるが、全体として古庭の風格を伝えている。山裾におかれた角型の雪見燈籠は後入であろう。寛政年間に寺觀が整えられたというので、庭園もそのころの作と思われ、現在も作庭時の面影をよく残しており、貴重である。

西光寺庭園

(名勝・指定)

与謝郡加悦町大字後野小字福井

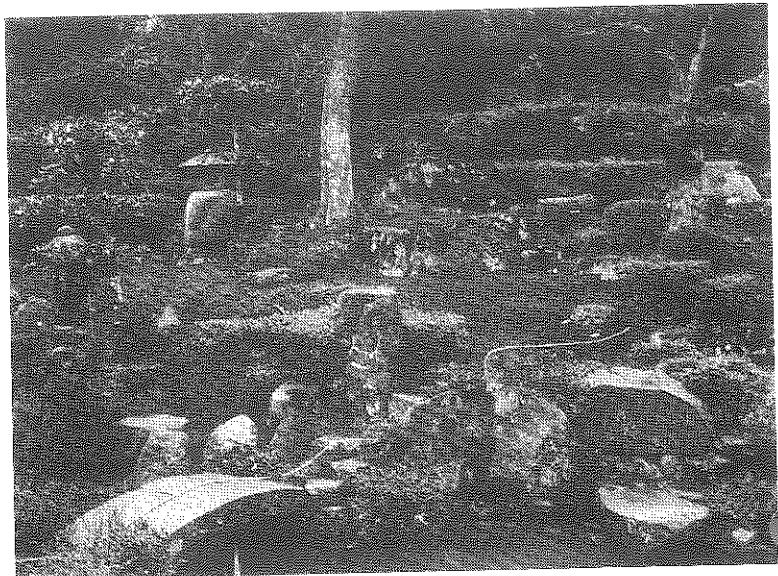
真言宗九鬼山西光寺は中世初期の創建とされ、境内には応永一六(一四〇九)年銘の板碑、裏山には中世火葬墓群などが存在する。

庫裏の西庭で手前には南北に細長い池を穿ち後ろはゆるく野筋状の起伏をつけて臥石本位のおだやかな枯山水的石組でまとめてある。池には切石反橋を渡し、護岸に覗き石を配し、まわりはすべて石組をめぐらす。池の水が漏れたため、護岸石組は近年改修されているが、原形を変えないよう注意したということである。近接する山の樹林を背景として落ち着いたたずまいが好ましい。但し、燈籠等の石造物は後入と思われる。文政六(一八二三)年刊行の『日本名園集』には江戸八景の一つ萬葉の「行徳帰帆」の風情を写したというが、その由来は明らかでない。地割・石組からも江戸時代後期の作と認められ、枯山水的石組の好例である。

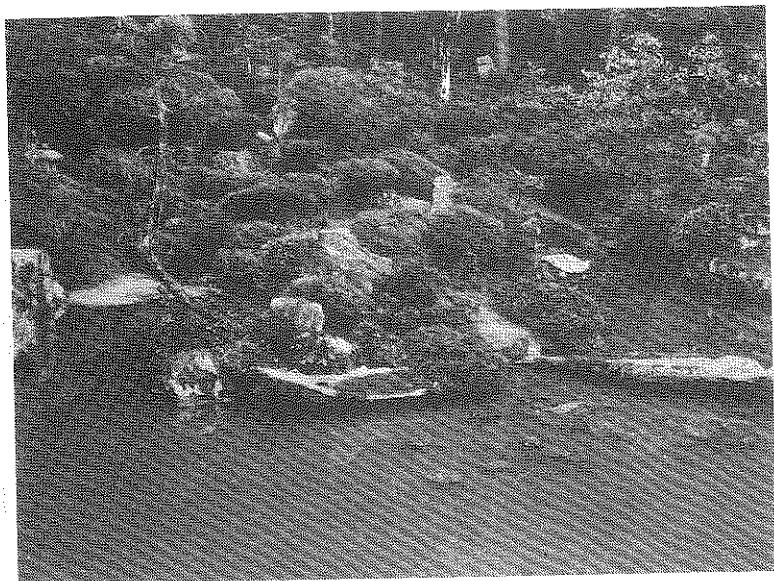
常栖寺庭園
臨済宗妙心寺派雲頂山常栖寺は中世の開山で、江戸時代初期に火灾に遭い、十八世紀末に本堂、庫裏、山門が再建されており、庭園もこの時期のものであろう。

庫裏北側の山裾に設けられた池庭で、ほぼ中央に中島を設け、ここに自然石三個を水面すれすれに連ねた石橋を渡して景としている。中島に接して顯著な舟石を配しているのは島を普陀落山と見たてた含み

与謝郡加悦町大字温江小字百合
(名勝・指定)



であろう。山畔部には丈高い本滝の石組があり、山からの導水路が認められる(現状は土砂で埋まる)。池の護岸及び中島の石組には古制を伝え造庭秘伝書的な地割ではあるが、丹後地方における江戸時代後期の数多くの庭園の中では見るべきものがあり、重要である。



朝倉神社のスギ

(天然記念物・指定)

船井郡園部町大字千歳小字岡崎

山陰線園部駅から船岡駅へと北上する途中進行方向右手の丘陵の先端に、周囲の樹木からひときわ抜ん出て高い樹冠を見せている。樹高は約三〇m、胸高幹周（地上一・五mの幹まわり）は九・〇mの巨木で、神社本殿の東側に位置する。幹は地上二・五mの部分で二本に分岐し、南側のものがやや太い。

神社拝殿の額に掲げられた、天保一〇（一八三九）年付の「奉貢請御帳本之事」という買請証文の内容から、千妻村の人々が山方奉行からこのスギを村社の神木として十両二分で買い取ったこと、またその当時このスギは幹まわりが一丈五尺二寸（約四・六m）であったことがわかる。

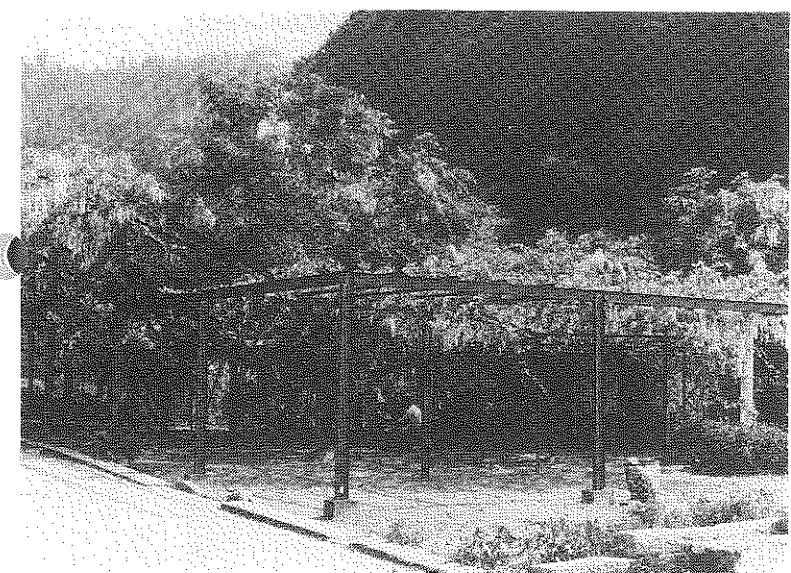
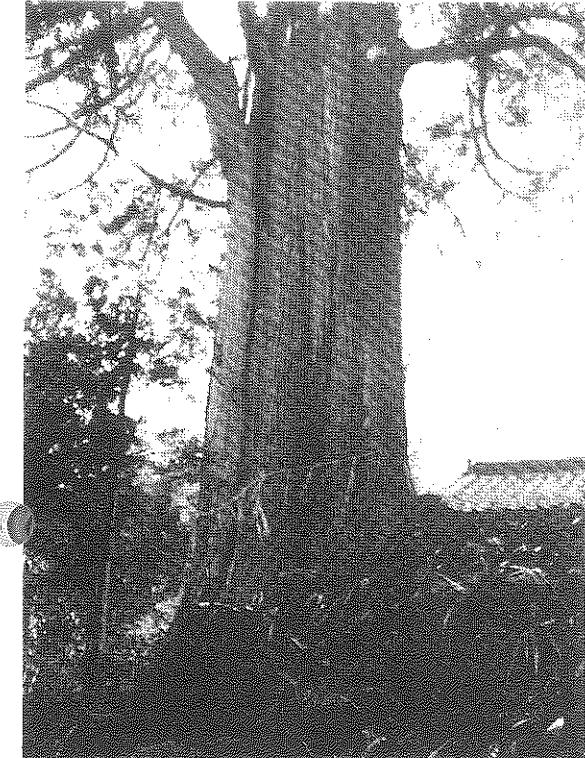
府下の社寺にスギの神木は多いが、そのうちでも最大といえる巨木であり、天保一〇年から一四〇年あまりの期間に幹まわりが約四・四m、太さとしてはほぼ二倍に成長したことがわかる貴重な樹木である。

オノ神のフジ

加佐郡大江町大字南有路小字福料寺

(天然記念物・指定)

大江町南有路から綾部市西方町に通じる谷あいの道が古地峠にさしかかる路傍に位置している。今では空洞化したケヤキの大木に、大小六株のフジが枝を絡ませており、最も太いフジでは根元近くで幹周が約一八〇m、高さは三mに及ぶ。ケヤキの根元から北、北東、東方向に枝蔓が拡がり、樹冠はおよそ三〇〇mを覆う規模となっている。花期は他の藤よりやや遅く五月中旬過ぎであり、長く美しい花穂の下で、毎年藤祭りが催される。この祭りはまた「藤の宮さんの祭」ともいわれ、フジとケヤキの根にはさまれた人頭大の石を御神体としたオノ神がわかる。



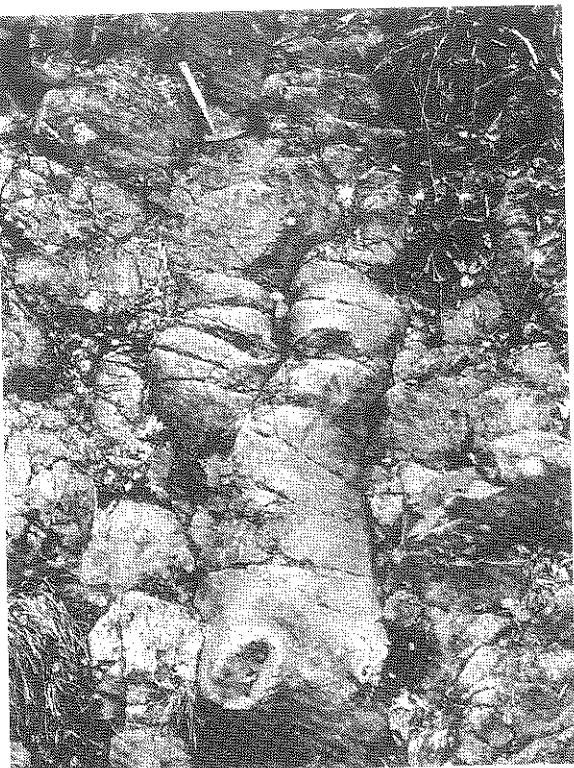
をあがめる一種の道祖神信仰から発しているといわれる。

このフジは昭和九年に文部省により天然記念物の指定をうけたが、三十一年に地方的なものという理由で指定を解除され、その後四十八年九月に大江町教育委員会が町の天然記念物に指定し、鉄骨製の藤棚を設置するなど、地元有踏保勝会とともに保護に努めている。

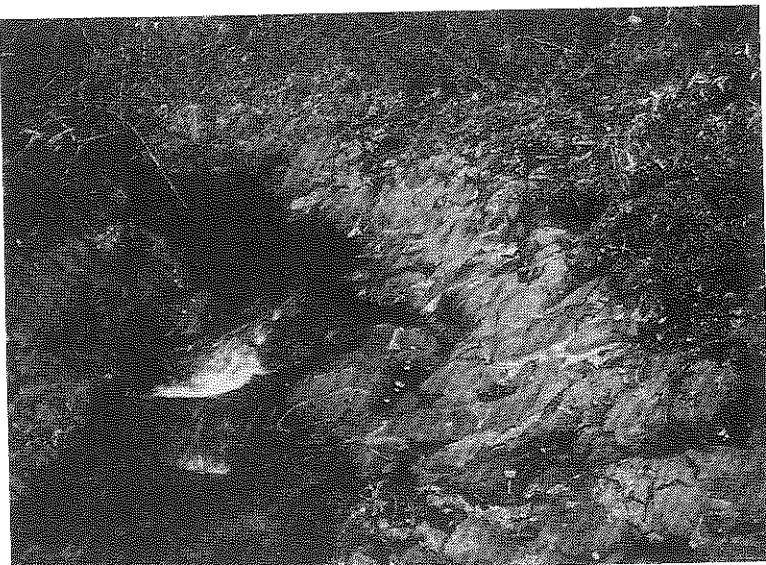
井戸及び細野の枕状溶岩

北桑田郡京北町イモジ谷・芦見谷

(天然記念物・指定)



イモジ谷の枝分かれ枕状溶岩



芦見谷の枕状溶岩

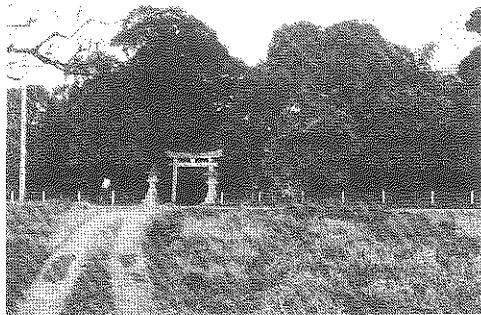
海底で噴出した溶岩流は、中心部が溶融したまま、海水と触れていた表面が急速に冷やされて、いつたん外側のみに殻がつくられる。さらに溶岩の噴出が続くと、その殻の一部を突き破るかたちで、溶岩の流れは段階的に前進し、重層してゆく。この外殻の形成と新たな突出の繰り返しによつてできる枕あるいは俵を積み並べたような構造をもつ岩体を枕状溶岩と呼ぶ。

丹波地帯の緑色岩（シャールスタイル）層には、この枕状溶岩が含

まれており、京北町内の井戸祖父谷の支谷、通称イモジ谷には、古生代二疊紀に噴出した枕状溶岩がある。暗緑色で緻密堅硬な岩盤の表面に、最大径六〇cm、全長一・三mの丸太のように伸びた枕状構造のひとつが見られ、溶岩流の方向に二又に枝分かれした状況がわかる極めて珍らしい形態をとどめている。また、細野芦見谷川の川床に露われた枕状溶岩は、中生代三疊紀に噴出したもので、川の流れに沿い約一〇mにわたって、枕を積み重ねた構造の断面が観察でき、枕状溶岩の構造を如実に示す露頭の好例といえる。

文化財環境保全地区

天満神社文化財環境保全地区
城陽市字市辺小字城ノ下八八
天満神社



旦椋神社文化財環境保全地区

城陽市字觀音堂小字甲畠一一二

旦椋神社

当社は旧觀音堂の産土神で、集落の北のや離れた長谷川の谷ぞいの山すそに鎮座する。東方の丘は土砂採取によつて削りとられている。平坦で長い参道の奥にある本殿は覆屋内にある二間社流造で、桃山時代のはなやかな装飾の建物である。境内は高いシイ中心の林で、参道沿いは低いカシである。本殿の周囲は少數のカエデ、後方の山はマツを中心とした針葉樹林である。



内神社文化財環境保全地区

八幡市内里内一他

内神社他

当社は内里の集落の西端に位置し、本殿は江戸時代中期の建物で、落着いた復古的な感じを持つ一間社流造である。森は全域にわたつてクスノキの高木が目立ち、そのまわりはサカキ・ヒノキである。北側には竹が群生するが、社殿前にはサクラン・タチバナが植えられており、全体に常緑広葉樹林である。境内林は本殿と一体となつて、水田地帯の遠目にも目立つ「鎮守の森」としての景観を持つ。



当社は市辺の集落からは、かなり離れた山麓の少し高いところに境内がある。本殿は小規模ながら本格的なつくりの一間社流造で、桃山時代のはなやかな装飾と正統的な手法を併せもつものである。参道から境内の東側にはクスノキ等の常緑広葉樹とスギ・ヒノキがまじり、さらにモウソウダケがある。境内西側は竹林であるが、カシ・ツバキもあり、参道にはカエデもある。

和伎座天乃夫岐壳神社文化財環境保全地区

相樂郡山城町大字平尾小字里屋敷五五二他
和伎座天乃夫岐壳神社

昨岡神社文化財環境保全地区

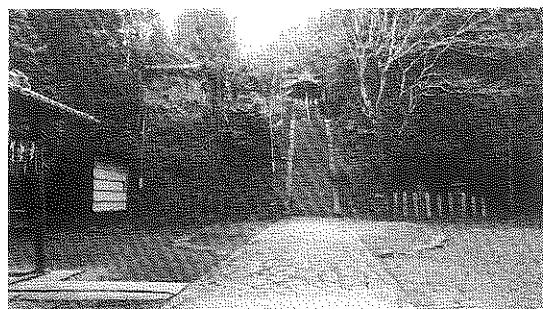
綴喜郡田辺町大字草内小字宮ノ後五他
昨岡神社他



当社は平尾の集落の東の丘陵部にあり、國鉄棚倉駅東方、旧大和街道から参道がのびる。本殿は南面する三間社流造で、元禄五年（一六九二）の建立である。本殿に連なる拝殿、西側には末社があり、切妻造の表門（四脚門）のある境内は明るい感じをうける。

当社は、水田地帯に残る、いわゆる「鎮守の森」としての景観をもつ。旧街道から東への参道沿いには、高さ一〇m程度のカシ・シイ類が連なり、折曲がつて北への参道沿いにはツバキやスギの大木が並ぶ。そして森としての景観をつくりだしているのは、境内北側と東側の常緑広葉樹である。

当社は、古代の農耕祭祀の儀礼を今に伝える「棚倉の居籠祭」（府指定無形民俗文化財）が知られ、また弥生期の集落跡とみられる遺跡も発見されており、森自身のもつ歴史的価値も高い。



朱智神社文化財環境保全地区

綴喜郡田辺町大字天王小字高ヶ峰

朱智神社

天王の集落を抜け、山道奥深く入った高ヶ峰の山上に鎮座する。鬼門の方向を軸とする境内構成で、境内は石段によつて三段に分けられる。第一段の耳石に永正四年（一五〇七）第二段に天文一〇（一五四二）の銘がある。

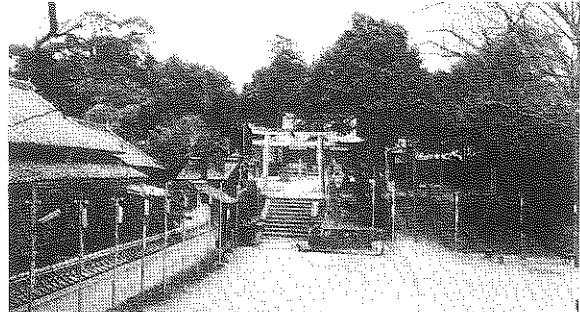
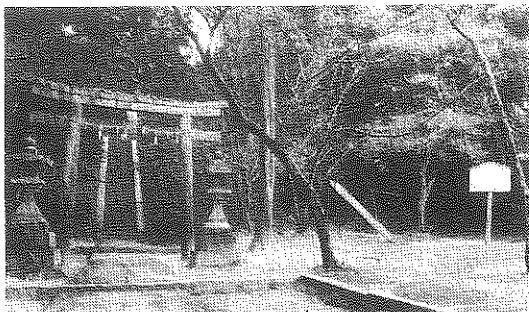
本殿は棟札と擬宝珠銘から慶長一七年（一六一二）の建立で、山城地方の神社建築のなかでも年代が古く質の高いものである。

当社は山中であり、参道までの道沿いにはヒノキ・スギ、背後に竹林がある。参道両側にはシイ・カシ等が、本殿北側にはスギを中心とした常緑広葉樹林である。

当社は木津川左岸の平野部にある草内の集落の南北を縦貫する道路の南端に位置する。本殿は一間社春日造で、彩色の施された装飾の豊かな江戸時代中期の建物である。境内周囲は堀で囲まれ、中世の環濠内の城の趣きがある。周辺が水田地帯であり、うつそうとした森は奥行のある景観を呈している。境内周辺は北端部に竹林があるものの、全体として常緑広葉樹林が占め、社殿に近づくにつれ針葉樹が増す。

棚倉孫神社文化財環境保全地区

綾喜郡田辺町大字田辺小字棚倉四九他
棚倉孫神社



当社は田辺町の中心街の北部、府道木津八幡線沿いの小高い丘の上に立地する。丘の下には新旧の民家が密集する。参道入口からの急坂を登ると境内が一望される。当社本殿は山城では年代の想定で最も古い桃山時代の一間社流造である。

本殿背後に竹林があり、社殿を取り囲むようシイ・クスノキの常緑広葉樹が茂り、参道附近にもモチ等の常緑広葉樹があり、更にカエデが彩りを添えている。

天神社文化財環境保全地区

綾喜郡田辺町大字松井小字向山一他

天神社他

当社は田辺町松井の集落の西手の山の中腹東側斜面に鎮座する。ふもとから長い参道の脇には旧神宮寺・中性院坊舎の跡とみえる平地も所々のこる。

本殿は一八世紀初頭、享保年間（一七一六～三六）の建立とみられ、山城地方では例の少ない二間社として貴重である。

社殿まわりには、スギ・ヒノキの針葉樹がみられ、シイ・カシの常緑広葉樹が取囲み、更にそのまわりを竹林が囲む。長くゆるやかな参道周辺にはサクラ・カエデの並木である。

高神社文化財環境保全地区

綾喜郡井手町大字多賀小字天王山一他
高神社



当社は多賀の集落と南谷川を隔てて、東方の山中にある。参道はゆるやかに曲線を描きながら進み、最後は急な石段が約五〇m程度続く。現本殿は横札によると慶長九年（一六〇四）に新造したもので、桃山時代の華やかな装飾をもつ三間社流造である。

境内林は総じてスギの植林であり、参道周辺はシイ・サカキに加えてカエデ・マツがみられる。社殿まわりはシイ・カシ・ツバキ等の常緑広葉樹である。

天神社文化財環境保全地区

綾喜郡宇治田原町大字奥山田小字宮垣内

一五〇他
天神社

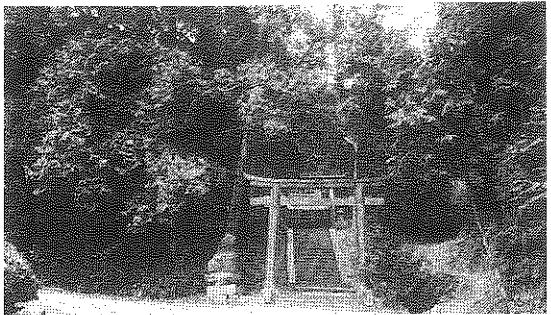
神社は奥山田の集落のほぼ中央の宮垣内にあり、小盆地の西側の山の小高い丘に、集落を見おろすように鎮座する。本殿・境内社は境内のなかで最も高いところに位置し、本殿・境内社とも江戸前期の建物であるが、古様をとどめたところが多く、室町時代とみえるところも多い。

神社東の道路からの参道のまわりはサクラ・カエデ・マツの植栽がなされ、社殿の背後はカシ・シイ等の常緑広葉樹林、更に前方はスギの植林である。



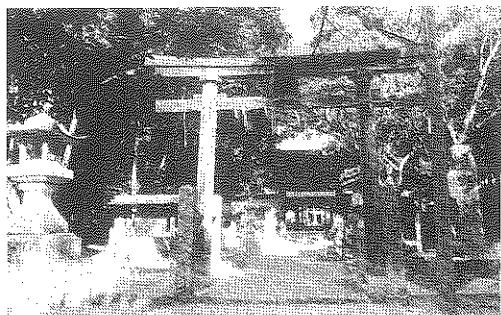
天神社文化財環境保全地区

相楽郡山城町大字神童子小字不晴谷一七七
天神社他



当社は鳴子川の一支流の奥深い谷間の集落・神童子の東端に位置し、西端の神童寺と向いあう。東端部に、わずかに開けた境内の奥に鎮座する本殿は、幾度かの改変を受けているものの基本的には室町時代の造営による建物である。また境内北西部の杉木立の中には重要文化財天神社十三重塔（石造）があり、また北縁部には鎌倉時代末期の作とおもわれる石造多宝塔がある。

境内背後の周縁部を常緑広葉樹が取囲み、山地の針葉樹林へと連なる。境内では南側の川に沿って、スギ・ヒノキが連なり、参道入口西側には針葉樹とカシが混在する。



松尾神社文化財環境保全地区

相楽郡山城町大字椿井小字松尾四一
松尾神社

当社は椿井の集落の東方の丘陵上にある。周囲は山林で、西方が茶畠、参道は南側からの竹林のなかを登る。周辺には、ため池が多い。

本殿は重要文化財の一間社春日造で、その東に同じく春日造の境内社を配し、いすれも奈良春日大社の古殿移築である。四脚門の表門と大型の拝殿は慶長年間建立の建物である。

周囲の森は竹林の侵食が激しいが、境内周辺には常緑樹の林が残る。北側にはヒノキがみられ、参道両側にはスギ・ヒノキがあり、うつそうとした森を形成している。



武内神社文化財環境保全地区

相楽郡精華町大字北稻八間小字北垣外
四三他
武内神社他

神社は北稻八間の集落の北、比較的緩やかな尾根の先端、やや高い所に鎮座する。現本殿は江戸時代前期に整えられたと考えられるが、細部によく古様をとどめ、また装飾は特徴的である。

境内入口は前面道路より高く、石垣で固められ、その上に土塀がめぐる。入口附近にはサクラが、本殿まわりにはツバキ・サカキが、周辺にはヒノキ・スギが広がる。

本殿後方の神社森はシイ・カシ等の常緑広葉樹であり、北側は竹林である。



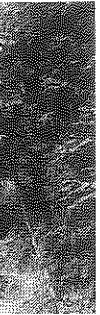
当社は西流する木津川の北岸、有市町の集落の東端、国道沿いに鎮座する。本殿は春日大社の古殿を正徳一年（一七一）に移築したもので、大社では元禄三年（一六九〇）の造営のもので、年代の確かな移建例である。

本殿周辺部、特に北側には高さ二〇m程度のスギ・ヒノキの大木がみられ、森は多种の常緑広葉樹が占め、うつそうとした景観を呈している。

有市国津神社文化財環境保全地区

相楽郡笠置町大字有市小字平ノ畠五六一
有市国津神社他

天神社



六所神社文化財環境保全地区

相模郡南山城村大字野殿小字宮ノ前一

六所神社



当社は山中の盆地である野殿にあり、三方を山に囲まれた谷の奥の平坦地に鎮座する。

本殿は一間社春日造、屋根厚板段葺で、その他の五社と共に茅葺の覆屋の中にある。

前方の舞台も茅葺であり、あまり例はない。境内は谷の奥にあるため、木立のなかの長い参道を持つ。境内周辺には一部常緑広葉樹があり、全体としてスキ・ヒノキが主体で、うつそうとした感じを与える針葉樹を中心とした鎮守の森である。



京都の文化財

昭和五八年三月二十五日発行

編集発行 京都府教育委員会

印刷者 中西印刷株式会社